トランスアトランティック・エコロジー
―ロマン主義と環境批評―

予稿集

2018 年（平成 30 年）3 月 11 日（日）

同志社大学室町キャンパス　寒梅館 6 階会議室

京都市上京区今出川通烏丸東入

主催：平成 27～30 年度科学研究費補助金・基盤研究(B)
「トランスアトランティック・エコロジー――環境文学／思想の還流と変容」
http://sunrise-n.com/transatlantic_ecology/

トランスアトランティック・エコロジー
―ロマン主義と環境批評―

2018年3月11日（日）

同志社大学
室町キャンパス 寒梅館６階会議室

京都市上京区今出川通烏丸東入
（地下鉄烏丸線「今出川」駅２番出口から徒歩1分）

公開セミナー　第一部（12:15 ～ 13:45）

司会：吉川　朗子
- 川津　雅江　　環大西洋の農業共和主義と北方の原野―ウルストンクラフトの環境意識
- 金津　和美　　破局のエコノミー―クレアとソローの自然史

司会：植月　恵一郎
- 小口　一郎　　“Romantic Things”を超えて―ワーズワスとソロー
- 伊藤　詔子　　レテの川から難破の浜辺へ―ミルトン、コールリッジ、ソロー

公開セミナー　第二部（14:00 ～ 15:30）

司会：金津　和美
- 成田　雅彦　　「歴史」の解体―エマソンの自然像と環大西洋思想の文脈
- 吉川　朗子　　鉄道・自動車・散策・環境意識―大西洋の両岸で

司会：伊藤　詔子
- 植月　恵一郎　鯨と海のエコロジー―イギリスとアメリカ
- 藤江　啓子　　メルヴィルとマテリアル・エコクリティシズム―創造性を中心に

講演（16:00 ～ 17:30）

司会：川津　雅江

鈴木 雅之氏　　「見えざる世界の証明」―スヴェーデンボリ、ブレイク、エマソン―
（“Testimony to the Invisible”：Swedenborg, Blake and Emerson）

懇親会（18:00 ～）

会　場：Hamac de Paradis 寒梅館（寒梅館1階）
会　費：¥4,000（フリードリンク）
問い合わせ先：金津和美（kkanatsu@mail.doshisha.ac.jp）
配布資料や懇親会参加をご希望される方は、前もってご連絡ください。

主催：平成 27 ～ 30 年度科学研究費補助金・基盤研究（B）「トランスアトランティック・エコロジー―環境文学／思想の還流と変容」（研究代表者：川津雅江）

http://sunrise-n.com/transatlantic_ecology/

トランスアトランティック・エコロジー

―ロマン主義と環境批評―

講師紹介

鈴木雅之（すずき まさし）：

1975年 東北大学大学院文学研究科博士課程単位取得満期退学（英文学専攻）。

1975年 山口大学、1990年 京都大学を経て 2009年 宮城学院女子大学。博士（文学、京都大学）。

FEA. 京都大学名誉教授。現在、宮城学院女子大学特命教授。

主要研究業績

1.『幻想の詩学―ウィリアム・ブレイク研究』京都：あぽろん社、1994.

2.『講座英米文学史・詩 II』共著、東京：大修館、2001.

3.『グノーシス―異端と近代』共著、東京：岩波書店、2001.

4.『越境する芸術家―現在（いま）、ブレイクを読む』共著、東京：英宝社、2002.

5.『揺るぎなき信念―イギリス・ロマン主義論集』共編著、東京：彩流社、2012.

6.『古典について、冷静に考えてみました』共著、東京：岩波書店、2016.

7. " 'Signal of solemn mourning'：Los/Blake's Sandals and Ancient Israelite Custom."
JEGP 100.1（2001）：40-56.

8. *The Reception of Blake in the Orient.* Co-ed. London: Continuum, 2006.

講演要旨

本講演の目的は、18世紀後半から19世紀半ばにかけて、ヨーロッパのみならず大西洋の両岸においても幅広く受容されたスウェーデンの神秘思想家エマニュエル・スヴェーデンボリ（1688-1772）を取り上げ、スヴェーデンボリがウィリアム・ブレイク（1757-1827）とラルフ・W・エマソン（1803-82）双方（年齢差は46歳）にどのような影響を与えたかを探ることである。そしてスヴェーデンボリ、ブレイク、エマソンの三者が、謂わば、環大西洋的エコロジーを根底で支える精神的支柱、ブレイクの言葉を使えば、「基盤」（Foundation）であり得たことを示す。ブレイクがスヴェーデンボリの神学的著作を評した「基盤」という言葉が、奇しくもトマス・カーライル（1795-1881）が親友エマソンの匿名で出版された『自然』（*Nature*, 1836）を評した言葉と重なることは、注目に値するだろう。聖なる「見えざる世界」の存在を確信すること、このことこそ、スヴェーデンボリが大西洋をはさんでブレイクとエマソンに残した偉大な遺産のひとつではなかったかと考える。個別の論考はあるにせよ、スヴェーデンボリを環大西洋的文学・文化交流の中心人物とみなすまとまった論考は、筆者の知る限り、これまでのところまだ出ていない。

公開セミナー

目　次

環大西洋の農業共和主義と北方の原野―ウルストンクラフトの環境意識　……1
川津雅江（名古屋経済大学名誉教授）

破局のエコノミー――クレアとソローの自然史　……5
金津和美（同志社大学教授）

“Romantic Things”を超えて―ワーズワスとソロー　……9
小口一郎（大阪大学教授）

レテの川から難破の浜辺へ―ミルトン、コールリッジ、ソロー　……13
伊藤詔子（広島大学名誉教授）

「歴史」の解体―エマソンの自然像と環大西洋思想の文脈　……19
成田雅彦（専修大学教授）

鉄道・自動車・散策・環境意識―大西洋の両岸で　……23
吉川朗子（神戸外国語大学教授）

鯨と海のエコロジー――イギリスとアメリカ　……27
植月惠一郎（日本大学教授）

メルヴィルとマテリアル・エコクリティシズム―創造性を中心に　……33
藤江啓子（愛媛大学教授）

環大西洋の農業共和主義と北方の原野

ウルストンクラフトの環境意識

川津雅江

ルソー的農業共和主義のアメリカ

1790 年代初期、イギリス、フランス、アメリカの急進主義者たちはロンドンやパリで交流し、ジャン=ジャック・ルソーの「農業共和主義」(Botting 20)に基づく社会を目指すべき理想の未来と考える点で一つになっていた。ルソーは、野蛮人の簡素で孤独な生活の終焉は農業の開始と共に起こり、不平等社会が生じると主張したけれども、同時に、大規模農場ではなく自給自足の小規模農業ならば自由な共和主義社会がもたらされると示唆した。フランス革命ジロンド党指導者ジャック・ピエール・ブリッソーの『アメリカ合衆国新旅行』(1792)、のちにウルストンクラフトの婚外子の父親になるアメリカ人ギルバート・イムレイの『北アメリカ西部地区の地誌』(1792)などはそうした理想の社会が北アメリカの開拓地に実現していると伝えた。

メアリ・ウルトンクラフトは環大西洋的急進主義者グループの数少ない女性の一人だった。本論では、彼女が北欧諸国への旅を通して、いかにルソー的農業共和主義のアメリカ版を共有しつつもそれに修正を加え、フェミニストとしてだけではなくグローバルな視野をもって環境破壊や食糧不足の問題に取り組んだのかを明らかにする。

北方の原野

若きコウルリッジとサウジーがイムレイの『地誌』を読んでサスケハナ河畔に「パンティソクラシー」の建設を夢見たように(Emerson 427-31)、ウルストンクラフトもイムレイに出会ってからアメリカ移住を考えたことがあった。しかし、彼女が 1795 年 6 月末に向かった先は、「大西洋の向こう側の原野」(Aikin xx)ではなく「北方の原野」(Holmes 17)だった。『北欧旅行記』(1796)は当時流行の旅行記と同じく書簡体形式だが、宛名の「あなた」としてイギリスの友人ではなくイムレイを暗示するアメリカ人が選ばれているのは、本書がただ単に自伝的記録ではなく、イムレイの『地誌』で描かれたアメリカ像に対する応答であることを示しているであろう。

『北欧旅行記』において、ウルストンクラフトは常に大西洋の向こう側を参照枠にしながら、北方の人、自然、社会などを記録する。たとえば、最初に上陸したスウェーデンの海岸近くの住民は、アメリカ原住民のように「獣のような人々」であり、その周囲の環境はアメリカの原野のように未開墾の不毛の地、「生命と美を生み出すのに必要なあらゆるもので覆われるのを待つ天地の骨」(6: 262)である。「天地の骨」の比喩は、ウルストンクラフトが不毛な未開地が豊かな食べ物を生産する開拓地に変わるのは必然であると考えていることを示す。ノルウェーでは

スウェーデンと違い、農民が「木を伐採しながら土地を開墾する。従って、毎年田舎は住民の生活を支える力をつけていく」(6: 288)。こうして開墾された土地はルソー的農業共和主義を体現するアメリカの開拓地に似ている。農民たちは自分たちの小さな農地で、自分たちの生活を支えるだけの食糧を生産し、平等と自由を甘受する。これは、「どの家族も一つの独立共同体でなくてはならなかった最初の耕作の取り組み」(6: 300)を思い起こさせるものである。ウルストンクラフトは、社会の進歩は「大地の開墾と足並みを揃えて」(6: 297)進むのであり、「地球の人口増加は必然的に地球の活用に向かわざるを得ない」(6: 288)と主張する。そしてアメリカの地形はノルウェーの「荒野」と似ているので、「あなた」(イムレイ)もアメリカで同じことを考えただろうと推測する(6: 288)。

食糧難

食糧難は当時ヨーロッパ中で深刻な社会的政治的問題になっていた。ウルストンクラフトが『人間の権利の擁護』(1790)でエドマンド・バークを批判したのは、彼が、1789 年 10 月パンがなくてベルサイユへ行進したパリの貧しい女性たちの「絶え間ない窮乏」(5: 58)を考慮しなかったからだ。彼女が 1792 年に渡ったフランスも、国内中で「パンと石けん」を求める民衆の声が高まっていた(Verhoevern, *Gilbert Imlay* 160)。1795 年にはイギリスも深刻な食糧難に襲われ、同年春から翌年の春まで各地で食糧暴動が起こった。スウェーデンでは 1756 年と 1773 年の飢饉がひどかったが、ウルストンクラフトは北欧への 3 ヶ月半の旅行中、戦争による税金の高騰とその結果の食品価格の高騰や食糧の密輸出などで、貧しい人々は食糧難にあえいでいるのを目撃した。

このような時代、食糧確保のための自然破壊は当然のごとく容認された。しかしながら、ウルストンクラフトは自然破壊を容認する一方で、「大地がすっかり開墾され、人で満たされる」遠い未来を予測し、さらにその先の、「土地がもはや支えることができない」ほどの人口超過による「世界的飢饉」までも危惧する(6: 294-95)。農業共和主義的アメリカの開拓地のヴィジョンは、ヨーロッパにおける食糧難からの避難所としての様相を帯びるけれども、人口超過が孕む問題は看過された。トマス・ロバート・マルサスは人口の幾何級数的割合の増加と食糧の算術的割合の増加の不均衡を指摘したが、それは「戦争、悪疫、自然災害」(Malthus 109)などの積極的阻止と出生率を下げる予防的阻止によって解消されると主張した。従って、マルサスにとって、世界的飢饉は起こり得なかった。

持続可能な開墾

ウルストンクラフトはマルサスと違い、世界的飢饉を回避するために、地球全体がすべて開墾されることのない、持続可能な進歩のあり方をノルウェーに見出す。ここでは野生のままの自然が残されているが、それは農民たちが「松の木の次の世代が十分成長するまで食糧を待つことはできない」(6: 308)ので、「森林を少し残しておく必要がある」(6: 307)と考えているからだ。ある木こりの家族は森

に囲まれた家に住み、家畜との間にも上下関係がない。家畜も人間も「等しく自分たちの土地」(6: 308 ; 引用者による強調)に住む住民である。森の中の木こりの家を地球規模に広げてみれば、それは人間と自然（動物）のエコロジカルな共生関係を暗示する。地球上のすべての人間が食糧を得るためには、ある程度の自然破壊(自分たちの土地の開墾)はやむを得ないが、すべての自然を破壊すれば人間も生存できなくなるのだ。

グローバルなエコロジーとエコノミー

ウルストンクラフトは北欧の自然との一体感や自然に対する感受性の発露などを描いたことで、エコフェミニストの先駆と言われている(Bowerbank, Hust, Kautz, Seeber)。だが、食糧問題への彼女の取り組みは、彼女がグローバルな視野をもったエコロジストであったことを示すとともに、エコロジーとエコノミーの語源が同じ「家」であることを改めて思い起こさせる。ウルストンクラフトは自然のエコノミーと同じく、人間の食糧生産・経済活動も余剰物や利益を出さないあり方、すなわちアメリカに移住したトマス・ペインが擁護したような「委託的商業」(Durey 670-79)を暗示する。彼女はスウェーデン国内で食品価格が高騰し、貧者が飢えているのに、「フランスへ小麦を、ドイツにライ麦を輸出する」(6: 254)ような少数だけを金持ちにする投機的商業を痛烈に批判したが、外国貿易そのものは否定しなかった。ノルウェーでは価格高騰のため「小麦やライ麦の輸出」(6: 273)が禁止されているが、木材、鉱物、魚、毛皮などの天然資源が輸出され、特に「塩漬け魚と干し魚」の輸出は相当な量であるという（6 : 347)。輸入品目は明示されていないが、おそらく自国で不足している食糧や工業製品であろう。委託的商業とは自国に豊富にあるものと不足しているが必要なものを他国と交換し、双方に利益が生じない経済活動であるが、その実現はかなり難しく、ノルウェーも貿易黒字である。しかし、地球全体においてノルウェーの農家のように食糧生産と消費のバランスを崩さないためには、食糧を余剰の国から不足の国へ運ばねばならない。ウルストンクラフトは、資源を枯渇させることなくグローバルな経済活動による平等な食糧配分の必要性を暗示したが、それは 21 世紀の今も取り組むべき課題である。

参考文献

Aikin, J[hon]. “On the Poetry of Dr. Goldsmith.” *The Poetical Works of Oliver Goldsmith, M.B*. New ed., London, 1796, pp. i-xxix.

Botting, Eileen. *Family Feuds: Wollstonecraft, Burke, and Rousseau on the Transformation of the Family*. SUNY Press, 2006.

Bowerbank, Sylvia. “The Bastille of Nature: Mary Wollstonecraft and Ecological Feminism.” Ryall and Sandbach-Dahlström, pp. 165-84.

---. *Speaking for Nature: Women and Ecologies of Early Modern England*. Johns Hopkins UP, 2004.

Brissot de Warville, J. P. *New Travels in the United States of America*. [Translated by Joel Barlow.] 2nd ed, London, 1794.

Dame, Frederick William. *Jean-Jacques Rousseau in American Literature: Traces, Influence, Transformation, 1760-1860: A Paradigm of French-German Culture Emanation in America*. Peter Lang, 1996.

Durey, M. "Thomas Paine's Apostles: Radical Emigrés and the Triumph of Jeffersonian Republicanism." *William and Mary Quarterly*, vol. 44, no.4, Oct. 1987, pp. 661-88.

Emerson, Oliver Farrar. "Notes on Gilbert Imlay, Early American Writer." *PMLA*, vol. 39, 1924, pp. 406-39.

Harper, Lila Marz. *Solitary Travelers: Nineteenth Century Women's Travel Narratives and the Scientific Vocation*. Fairleigh Dickinson UP/Associated UPs, 2001.

Holmes, Richard. Introduction and Notes. *A Short Residence in Sweden, Norway and Denmark*, by Mary Wollstonecraft, *and Memoirs of the Author of 'The Rights of Woman,'* by William Godwin, edited by Richard Holmes, Penguin, 1987, pp. 9-55, 279-308.

Hust, Karen. "In Suspect Terrain: Mary Wollstonecraft Confronts Mother Nature in *Letters Written during a Short Residence in Sweden, Norway, and Denmark*." *Women's Studies*, vol. 25, no. 5, 1996, pp. 483-505.

Imlay, George [i.e. Gilbert]. *A Topographical Description of the Western Territory of North America*. London, 1793.

Kautz, Beth Dolan. "Mary Wollstonecraft's Salutary Picturesque: Curing Melancholia in the Landscape." *European Romantic Review*, vol. 13, 2002, pp. 35-48.

[Malthus, Thomas Robert.] *An Essay on the Principle of Population, as it Affects the Future Improvement of Society*. London, 1798.

Nyström, Per. *Mary Wollstonecraft's Scandinavian Journey*. Translated by George R. Otter. Kungl, 1980.

Rousseau, Jean-Jacques. *Rousseau's Political Writings*. Edited by Alan Ritter and Julia Conaway Bondanella, translated by Julia Conaway Bondanella. Norton, 1988.

Ryall, Anka, and Catherine Sandbach-Dahlström, editors. *Mary Wollstonecraft's Journey to Scandinavia: Essays*. Almqviest and Wiksell International, 2003.

Seeber, Barbara K. "'I sympathize in their pains and pleasures': Women and Animals in Mary Wollstonecraft." *Animal Subjects: An Ethical Reader in a Posthuman World*, edited by Jodey Castricano, Wilfrid Laurier UP, 2008, pp. 223-40.

Todd, Janet. *Mary Wollstonecraft: A Revolutionary Life*. Columbia UP, 2000.

Verhoeven, Wil. *Americomania and the French Revolution Debate, 1789-1800*. Cambridge UP, 2013.

---. *Gilbert Imlay: Citizen of the World*. Pickering, 2008.

Wardle, Ralph. *Collected Letters of Mary Wollstonecraft*. Cornell UP, 1979.

Wollstonecraft, Mary. *The Works of Mary Wollstonecraft*. Edited by Janet Todd and Marilyn Butler. 7 vols. Pickering, 1989.

破局のエコノミー

クレアとソローの自然史

金津和美

はじめに

ジョン・クレア（John Clare 1793-1864）とヘンリー・ディビッド・ソロー（Henry David Thoreau 1817-1862）、大西洋を隔ててこの二人の詩人・文学者が互いの作品を読んだという記録はない。しかしながら、昨今、エコクリティシズムという新たな批評空間が開かれたことで、クレアとソローの詩想の共振性に新たな関心が向けられている。例えば、2015 年発刊の *The John Clare Society Journal* では、"John Clare and Henry David Thoreau" というタイトルで特集が組まれ、二人の作品における「歩く」という行為の意味 (Newman)、鳥の描写に見られる人間と自然との関係性の再構築 (Poetzsch)、そして自然の神秘を探り、驚嘆する "wonder" (驚き) の詩学という視点から (Mynott)、クレアとソローの文学の共通点を明化する三本の論文が掲載されている。

このようなエコクリティシズム研究、及び、クレア研究の昨今の動向を踏まえ、本稿ではクレアとソローの文学を自然史との関わりにおいて読み解くことで、その共振性の考察を深化させたい。

クレアについては、「ヘルプストンの自然史」("Natural History in Helpston")というタイトルのもとに、1823 年から数年に渡って執筆された書簡及び散文作品に注目する。故郷ヘルプストンの自然を精緻に描いたこの観察記録は、同時期に創作された『羊飼いの暦』(*Shepherd's Calendar*) を始めとして、現代の環境批評において評価が高い一連の鳥の巣の詩へと発展し、クレアの詩風に大きな転機をもたらした作品として重要である。一方、ソローの旅行記『コッド岬』(*Cape Cod*) は、ウォールデン湖畔での実験的生活と四季を通じた自然の変化を綴った代表作『ウォールデン——森の生活』(*Walden*) の後に出版された。それまでの作品に見られるロマンティック・タイポロジーと呼ばれる特質を破棄した（伊藤 44）とされる『コッド岬』は、新たな自然史の試みとしてソローの晩年の自然観への転換点となった作品である。

本稿では、ソローの『コッド岬』、そしてクレアの「ヘルプストンの自然史」に関わる散文・詩作品を相互に読み解きながら、両者の詩想の共振性を探ることでトランスアトランティック・エコロジーの一潮流を辿る。人を沼地や海の動植物といった自然の事物とともに描くことで、彼らがいかに人間中心主義的自然観から自由になり、人とモノとの境界を越えた自然観を目指したのか。またその自然観は、いかに近代の進歩主義的歴史観を解体し、生態系に組み込まれた破局のシステムとの対峙を迫るものであったのか。クレアとソローの自然史の考察を通して、ロマン主義のエコロジーの内奥に生命の物質性とその破局の運命を見つめる

眼差しがあることを明らかにしてみたい。

『コッド岬』——海の再発見

1849 年から 1855 年にかけて、三回に渡ってマサチューセッツ州コッド岬を訪れたソローの旅行記『コッド岬』は、難破船セント・ジョン号が打ち上げられたコーハセットの浜辺の描写で始まる。死者 145 人を出したとされるこの海難事故の被害の様子を、ソローはありのままに直截な筆致で描いている。溺死した少女の「土気色に腫れ上がった傷だらけの遺体」(853) には、「衣服の切れ端」(853) が纏わり付き、「腫れ上がった頚の肉」(853)にはネックレスが半ば食い込んでいて、その虚ろな姿そのものが荒波にもまれ、ねじ曲げられた難破船の船体のようである。しかし、この殺伐とした光景を前に、悲痛や哀れみといった感傷的な言葉は一切述べられない。むしろソローの関心は、「ヒバマタ、ケルプ、海藻など、難破した海藻の類」(856) を肥料としてかき集め、荷馬車に詰め込む人たちに寄せているかのようだ。彼らにとって、浜辺にころがる溺死体は「打ち上げられた別の海藻に過ぎず、何の役にも立たない」(856)。『コッド岬』における難破船の風景は、人間を「衣服の切れ端」や頚の肉にくいこんだネックレスに置き換え、海藻に等しいものとして描き、生命の物質性を暴き出している。

また『コッド岬』の執筆にあたってソローは、多数の博物誌、地誌、歴史資料を参照しながら、人間を頂点とした自然の秩序、歴史観を相対化し、解体しようとしている。例えば、ソローは「陸地ではなく、海が生命の中心領域」(127)だという主張に共感し、アガシ（J. Louis Aggasiz）、グールド (Augustus A. Gould)、デゾール (Eduard Desor) といった博物学・動物学者たちと並んでチャールズ・ダーウィン (Charles Darwin) の名前をあげている。「陸上の最も密生した森林も、それとよく似た海の密林地帯と比べると、ほとんど砂漠のようにしか見えない」(937-38)というダーウィンとともに、ソローは海を不毛なものとしてではなく、「諸大陸の実験室」(938)として再発見する。海という「諸大陸の実験室」から吐き出された様々なモノを観察するソローは、ハイランド灯台近くの砂地にウミベアキノキリンソウが蕾をつけ、カブ、ビート、ニンジンが生育しているのに驚き、それが前年に難破したフランクリン号から流れ着いた種が根づいて育ったものと知る (965)。それとともにソローは、海難事故に象徴される破局は、生命が受け入れるべき運命であり、またそれこそが自然のシステムに組み込まれた生成の契機であるという確信を得る。

「ヘルプストンの自然史」——失われた沼地

生命の物質性、それゆえに避けられない破局の運命という問題は、「ヘルプストンの自然史」を始めとするクレアの散文作品、またそれに関わる詩作品に通底する主題でもある。クレアが描く故郷ヘルプストンの風景は、1809 年に可決され、1820 年以降に施行された囲い込み法によって急激に変化していた。ヘルプストンを含むイングランド東部には、もともと広大な沼地 (Fens) が広がっていたが、しかし、古くは中石器時代から、主には 18 世紀から 19 世紀にかけて、農作地へ

と開拓するための灌漑が行われ、現代ではわずかな保護地区を除いてかつての沼地の姿はほとんど残されていない。ソローの『コッド岬』が海難事故という破局を乗り越えて拡散・繁茂する自然のシステムを描いたのとは異なり、クレアの「ヘルプストンの自然史」は、囲い込みによって奪われ、失われてゆく自然を綴った破局の記録である。

さらに「ヘルプストンの自然史」は、囲い込みによる故郷の喪失のみならず、詩人にとっての言説空間の喪失という、二重の破局を背景としているがゆえに、クレアの詩想において重要な意味を持つ。「ヘルプストンの自然史」執筆に携わった 1823 年から 1825 年頃、農民詩人クレアと編集者ジョン・テイラー (John Taylor) との協調関係は終焉を迎える。テイラーは文芸誌『ロンドン・マガジン』誌の看板詩人としてクレアを世に送り出した人物であったが、1825 年に『ロンドン・マガジン』誌を手放し、三冊目の詩集『羊飼いの暦』を最後にクレアの詩作編集から手を引いた。クレアにとってテイラーは、ロンドンの文学界と自分をつなぐ道であり、それが閉ざされたことで、クレアは新たな言説空間を求めて彷徨ことを余儀なくされる。

本稿では、ソローと同じく、クレアもまたそれまでの博物誌から距離を置き、独自の自然観、歴史観を語る言葉を模索しようとしたことを、「ヘルプストンの自然史」を中心とした作品のなかに探っていく。特に、人と鳥、人とモノとの相対的な関係性を描いた鳥の巣の詩に注目し、さらに、これら詩作品に頻繁に登場する“decay” という語の意味について考察することを通して、クレアの詩的世界における破局のエコノミーを明らかにしてみたい。

参考文献

Bate, Jonathan. *John Clare: A Biography*. Farrar, Straus and Giroux, 2003.

Clare, John. *“I AM”: The Selected Poetry of John Clare*. Edited by Jonathan Bate. Farrar, Straus and Giroux, 2003.

---. *John Clare: Selected Poems*. Edited by Geoffrey Summerfield. Penguin Books, 1990.

---. *The Natural History Prose Writing of John Clare*. Edited by Margaret Grainger. Oxford UP, 1983.

Chirico, Paul. *John Clare and the Imagination of the Reader*. Palgrave Macmillan, 2007.

Goodridge, John . *John Clare and Community*. Cambridge UP, 2013.

Gottlieb, Evan. *Romantic Realities: Speculative Realism and British Romanticism*. Edinburgh UP, 2016.

Horiuchi, Masaki, editor. *Thoreau in the 21st Century Perspectives from Japan*. Kinseido, 2017.

Hutchings, Kevin and John Miller, editors. *Transatlantic Literary Ecologies: Nature and Culture in the Nineteenth-Century Anglophone Atlantic World*. Routledge, 2016.

Iovino, Serenella and Serpil Opemann, editors. *Material Ecocritism*. Indiana UP, 2014.

Keegan, Bidget. *British Labouring-Class Nature Poetry, 1730-1837*. Palgrave Macmillan, 2008.

Kovesi, Simon. *John Clare: Nature, Criticism and History*. Palgrave Macmillan, 2017.

Kovesi, Simon and Scott McEarthron, editors. *New Essays on John Clare: Poetry, Culture and Cummuniry*. Cambridge UP, 2015.

Mynott, Jeremy. "Wonder: Some Reflections on John Clare and Henry David Thoreau." *The John Clare Society Journal*, no.34, July 2015, pp.75-86.

Newman, John. "John Clare, Henry David Thoreau, and Walking." *The John Clare Society Journal*, no. 34, July 2015, pp.51-62.

Poetzsch, Markus. "The Brighter Side of 'Dark Ecology': John Clare and Henry David Thoreau." *The John Clare Society Journal*, no. 34, July 2015, pp.63-74.

Rignall, John and H. Gustav Klaus, editors. *Ecology and the Literature of British Left: The Red and the Green*. Ashgate, 2012.

Taylor, Bron. *Dark Green Religion: Nature Spirituality and the Planetary Future*. U of California P. 2010.

Thoreau, Henry David. *A Week on the Concord and Merrimack Rivers, Walden:or, Life in the Woods, The Main Woods, Cape Cod*. Edited by Robert F. Sayre. The Library of America, 1985.

---. *Excursions*. Edited by Joseph J. Moldenhauer. Princeton UP, 2007.

Weiner, Stephanie Kuduk. *Clare's Lyric: John Clare and Three Modern Poets*. Oxford UP, 2014.

伊藤詔子　『よみがえるソロー――ネイチャーライティングとアメリカ社会』　柏書房　1998 年

ソロー、ヘンリー・デイヴィッド　『コッド岬』　飯田実　訳　工作舎　1993 年

“Romantic Things”を超えて

ワーズワスとソロー

小口一郎

はじめに

William Wordsworth と Henry David Thoreau は意義ある比較の対象である。彼らはイギリスとアメリカのロマン主義を代表する文人であり、特にソローはイギリス・ロマン派詩人たちに対する意識を明言している。この意味で彼らを対照・比較の観点から考察することには根拠があり、すでに多くの先行研究がある。ソローとイギリス・ロマン主義については Miller、McIntosh、Hoag などが、ソローとワーズワスについては Fergenson や Moldenhauer が代表的であろう。

これに加え、環境文学批評も今後重要な貢献をしていくと思われる。ワーズワスもソローも自然を能動的存在としてとらえ、自然と人間主体の不可分な関係を創作の重要な源泉にしたが、こうした生命論的な世界観は、事物の能動的作用（agency）に注目する新唯物論（the New Materialisms）や物質的環境批評（material ecocriticism）によって再評価され、新たな解釈を与えられつつあるからだ。またワーズワスとソローは、自然の内奥への旅の中で日常的認識の枠組みが覆される体験をするが、そこには自然の「他者性」という、物質的環境批評にかかわるもう一つの重要な論点が提起されている。

この小論では、*The Prelude* をはじめとするワーズワスの詩と、ソローの *Walden* と *The Maine Woods* を取り上げ、物質的環境批評の観点から両者の比較・対照を行い、環大西洋ロマン主義におけるエコロジー的展開の一側面を素描したい。

「もの」は能動的作用者

自然環境が歴史・文化の能動的形成者であったことは、すでに 20 世紀前半、Aldo Leopold が提起していた（104-05）。近年、環境批評の「物質的転換」によって、人間以外の環境的存在も「能動的作用」が内在する「自由で自律的な行為者」であり、人間主体による意味づけが書き込まれるだけの受動的な場ではないことが主張されている（Alaimo 244-50）。これは環境と人間について倫理的、認識論的、存在論的な再考を迫る展開であり、近代的人間主体の特権性を揺るがし、人間を環境、物質、身体に解放する意義を有すると言えるだろう。

ワーズワスとソローは、この思想潮流に位置づけることが可能である。両者とも自然の能動的作用を認識し、人間の主体と身体はそうした能動性の交響に参与していると主張することで、ポストヒューマン的状況を予言していたからである。

ワーズワスの『序曲』第 1 巻、第 2 巻は、詩人の精神の成長を可能にする自然の能動的な働きかけのエピソードに満ちている。その思想的根拠となる断片詩 “There is an active principle”では、森羅万象に“active principle” (1)が内在し、この

原理のもとで万物は他の存在に力を及ぼし、人間を含む相互的な意識のネットワークを構成していることを明言している。ただしこの自然観には S. T. Coleridge の宗教的形而上学の影響が強いため、現代的意義は限られてくるかもしれない。

翻って半世紀後のソローの場合、形而上学性は比較的希薄になる。初期には R. W. Emerson の超絶主義のもと、先験的な“the plan of the universe” (“Wachusett” qtd. Oelschlaeger 138)を自然の中に求めたが、彼の独創性はむしろそこから脱却していくところに始まるからだ。

ソローにおける自然物の能動的作用については、R. L. Johnson の先駆的な研究がある。ジョンソンは、主体の内と外、精神と物質世界の二元論を解体する Jane Bennett や Stacy Alaimo の議論に依拠しながら、ソローのテクストに頻出する「音、ルーティーン、植物の成長」（615）に、物質と魂の相互性と物質の能動的作用を読みとった。ソローにおけるこうした自然物の能動性は、ジョンソンが論じたよりも、さらに日常的な次元の中にも読み取れる。例えば『メインの森』のソローは、生物と非生物が境界を超えて相互浸透する事態を目の当たりにする。例えば、「灰色の無言の岩は、岩の反芻物を噛みしめながら草をはむ群れだ」(61)と述べ、無生物から生物への、飛来する小鳥を「風にとばされる岩の破片」に見立てることで逆方向の越境をほのめかしている。人為と自然の境界もあいまいとなる。バーントランズと呼ばれる焼け焦げた土地は焼き畑に見えるが、実は落雷の産物であり、自然による人為の模倣行為を思わせる。またこの土地は動物たちの生存をささえる能動的作用者でもあった。Thomas Hardy の *Return of the Native* におけるエグドンヒースは、エコシステムが能動的作用者となる例であると指摘されているが（Oppermann and Iovino 80-81）、バーントランズにも同様の意味を読み込むことができるかもしれない。

汎神論や超絶主義を回避しながら事物の能動性を描くもう一つの例は、『ウォールデン』における「砂山」である。鉄道建設によって作られた砂山は、冬から春へ向かい氷が解け出すなかで、植物の葉、動物や人間の臓器や体、昆虫の変態、河川の地形形成、人間のコミュニティなどを幾重にも擬態しながら変容を続ける（272）。ここには自然的秩序と社会的秩序の分離の拒否（Buell 43）をはじめ、様々なレベルの越境が具現化されているが、その中核にはソローによる事物の能動的作用の直観と、その即物的提示がある。

表象を超える「もの」

ワーズワスとソローには、比較・対照の見地からもう一つ考察すべきテーマがある。それは彼らが人間の解釈が届かない自然、つまり表象不能の他者を意識していたことである。そうした体験は、能動的作用者の認識とは別の意味で「もの」としての自然を探る試みであり、やはり現代の環境批評に示唆を与えるだろう。

ワーズワスの『序曲』第 6 巻はアルプス旅行の物語である。彼にとってのアルプスは精神を根本から揺るがし、第 6 巻後半部はその破壊的体験を収集するための努力に費やされる。アルプスへの道中、文化と原初的自然はパストラル的雰囲気（“pastoral life” [1805.6.437]）のなかで融合していた。しかしこの状況は、巨大

なモンブランの姿によって粉砕される。モンブランは“a soulless image” (1805.6.54)として、心の中の想念を跡形もなく破壊したからだ。アルプスの圧倒的風景をいかに認識の枠組みに入れるのか、それがワーズワスの課題となる。

その方法は一言で言って、創造的想像力の発動であった。アルプスの峠を越えたあと、ワーズワスは突如として想像力(“Imagination” [1805.6.537])に呼びかけ、その偉大さ、無限性、永遠性を賛美する。これは自分自身の精神への自己言及であり、前後関係からして、アルプスの暴力的な風景によって精神が脅威にさらされ、それに対抗するため精神内面に無限の力を与えるという防衛規制と解釈できるだろう（Weiskel 202-03)。事実、直後に描写されるゴンド峡谷の荒々しい風景は、理解しがたい矛盾を抱えながらも、最終的にはアポカリプスと永遠という枠組みに包摂されている。それは想像力の力業であり、黙示という想像力の外在的象徴の活用でもあった。

ワーズワスと異なり、『メインの森』のソローはロマン主義的想像力とは無縁である。クターディン山を目指す旅の途上、自然はおおむね心地よい存在であったが、ある段階でこの山は激しいアルプス的相貌を見せつけるようになる。それは崩壊の危機をはらんだ、非日常的な巨大な岩塊であり、地球を構成する「原材料」（63）であるかのようだった。自然は「おまえが凍えようが飢えようが、震えて命を落とそうが、ここには神殿も祭壇もなく、私の耳におまえの声が届くこともない」(64）と言い、非人間性をあらわにする。クターディン山は原初の地球であり、人が住める状態の前の、物質（Matter）段階の自然だという（70)。

19 世紀中期のソローは、想像力という形而上学的枠組みに体験を囲い込むことはもはやできなかったのだろう。しかし彼が選んだことばが「物質」(Matter）であったことは注目に値する。汎神論も、ワーズワス的想像力も経由せずに到達した理解は、原初的自然の他者性は「物質」性であったことである。ワーズワスが自らの内面に向かうことで目をそらした、あのモンブランの“soulless”な相貌は、ソローによって強力に即物的、かつ現代的な命名をされたのだ。このむき出しの「物質」は「人間」を拒絶する一方、人体の物質性と緊密に関係しうるものである。クターディン山の岩塊に直面した後、ソローは自らの身体もまた「この物質」（this matter [71]）であることを強烈に意識し、「もの」の次元で地球との直接的な触れ合いを激しく求めている（“. . . rocks, trees, wind on our cheeks! the solid earth! . . . Contact! Contact!” [71])。

他者と物質、そして人間の身体までを架橋したこの大胆なテクストは、例えば Kate Rigby の「エコ創造の（不）可能性」論などの環境批評と、あわせて読む必要があるだろう。

おわりに

小論は、ワーズワスとソローに、自然の能動的作用と、表象不能の他者の物質性という、2 つの問題を読みこんだ。バラードが遂行性の概念の考察から、能動的作用は表象性を超えると主張するように（122-29)、この二者は両立しないアプローチから見えてくる異種の問題なのかもしれない。しかし大西洋をはさんだ文

人がこの二つの問題に言及し、それが環境批評的意義をもつことは注目すべきだと思われる。物質的自然のエコロジー的解釈は、ワーズワスとソローのテクスト的相互浸透においてさらなる解明を待っていると言えよう。

参考文献

Alaimo, Stacy. "Trans-Corporeal Feminism and the Ethical Space of Nature." *Material Feminisms*. Ed. Stacy Alaimo and Susan Hekman. Bloomington: Indiana UP, 2008. 237-64. Print.

Barad, Karen. "Posthumanist Performativity: Toward an Understanding of How Matter Comes to Matter." *Material Feminisms*. Ed. Stacy Alaimo and Susan Hekman. Bloomington: Indiana UP, 2008. 120-54. Print.

Buell, Lawrence. *The Future of Environmental Criticism: Environmental Crisis and Literary Imagination*. Malden: Blackwell, 2005. Print.

Fergenson, Laraine. "Wordsworth and Thoreau: The Relationship between Man and Nature." *Thoreau Journal Quarterly* 11 (1979): 3-10. Print.

Hoag, Ronald Wesley. "The Mark on the Wilderness: Thoreau's Contact with Ktaadn." *Texas Studies in Literature and Language* 24 (1982): 23-46. Print.

Johnson, Rochelle L. "'This Enchantment Is No Delusion': Henry David Thoreau, the New Materialisms, and Ineffable Materiality." *Interdisciplinary Studies in Literature and Environment* 21 (2014): 606-35. Web. doi: 10.1093/isle/isu078.

Leopold, Aldo. "The Land Ethic." In *Environmental Philosophy: From Animal Rights to Radical Ecolog*y. Ed. Michael E. Zimmerman, et al. 4th ed. Upper Saddle River: Pearson, 2005. 102-115. Print.

McIntosh, James. *Thoreau as Romantic Naturalist: His Shifting Stance toward Nature*. Ithaca: Cornell UP, 1974. Print.

Miller, Perry. "Thoreau in the Context of International Romanticism." *New England Quarterly* 34 (1961): 147-59. Print.

Moldenhauer, Joseph J. "Walden and Wordsworth's Guide to the English Lake District." *Studies in American Renaissance* (1990): 261-92. Print.

Rigby, Kate. "Earth, World, Text: On the (Im)possibility of Ecopoiesis." *NLH* 35 (2004): 427-42. Print.

Thoreau, Henry David. In *The Maine Woods*. Ed. Joseph J. Moldenhauer. Princeton: Princeton UP, 1972. Print.

—. *Walden*. Ed. Stephen Fender. Oxford: Oxford UP, 1997. Print.

Weiskel, Thomas. *The Romantic Sublime: Studies in the Structure and Psychology of Transcendence*. 1976. Baltimore: Johns Hopkins UP, 1986. Print.

Wordsworth, William. *The Prelude: The Four Texts (1798, 1799, 1805, 1850)*. Ed. Jonathan Wordsworth. Harmondsworth: Penguin, 1995. Print.

—. *William Wordsworth*. The Oxford Authors. Ed. Stephen Gill. Oxford: Oxford UP, 1984. Print.

ミルトン、コールリッジ、ソロー

レテの川から難破の浜辺へ

伊藤詔子

はじめに——トランスアトランティック・ソロー

ソローは“Walking”で、「大西洋はわたるべきレテの川」（70）と書いている。また地理学者 Guyot の「植物界が動物界のために創られているようにアメリカは旧世界の人間のために創られている」(72)との文明と生命の西進説を神秘的レベルにまで拡大している。一方大西洋を渡る船の難破の光景で始まる *Cape Cod* では旧世界の不気味な幻影と難破としての浜辺のストーリーをミルトンを響かせて展開する。本論はこの二つの対照的な旧世界観から、ソローの環大西洋的詩学を考察する。

プリンストン版ソロー全集 *Early Essays* には、チョーサー、カーライル、ウォールター・ローリー、オシアンなど多くの英文学論が収録され、*Translations* には、ギリシャ、ローマ、インド古典文学の翻訳をまとめてある。そしてミルトンはイギリスロマン派の場合と同様、アメリカ超絶主義作家のレガシー形成に絶大な影響を与えたことが Anglen、Cole、Armstrong らの研究によって明らかにされている。ソローのテキストはこれら旧世界文学を背景に新世界の文学を樹立する、いわばパラダイムシフトの文学である。小論ではまずロマン派最大の表象である鳥を検討してソローの新世界の自然表象を検討し、自然への該博な考察を持つコールリッジの影響の内実を探る。また旧世界文学を先駆的思想に異種混交していく際見逃せないミルトンの影響にも焦点をあてたい。

ロマン派の鳥、『ジャーナル』の鳥、『ウォールデン』の鳥

ソローはエマソンの完全な影響下 1836 年“Nature”の洗礼を受け、“American Scholar”にも鼓舞される。「アメリカの知的独立宣言」は「わたしたちの依存の時代、他国の学問に対するわたしたちの長い徒弟時代はいま終わろうとしている」と始まる。ソローもまた 36 年のエッセイ“Advantage and disadvantage of foreign influence on American literature”で、「アメリカはまだ植民地である。(中略)アメリカ作家はオシアンの模倣ばかりし生垣 1(hedge)に止まったスカイラークやナイティンゲールを歌うが、自国のツグミ[redbrestrobin、北米種]が、開墾地にどこまでも続く杭柵(rail trail)で鳴くのは無視する」(41)とした。ソローにとって文学的独立とは、新世界の素材による新しい風景の構築であり、とりわけイギリスロマン派のイコンであるスカイラークとナイティンゲールとの訣別を意味した。

ソローはアメリカの自然は独自にアメリカ的意義を持つものとして思索し、14 巻のジャーナルには約 300 種の鳥について厖大な自然史的観察記述を残し、鳥に自由や「より高き生活」の預言的メッセージを読み取ろうとするロマン派的な態度も一貫している。しかし『ウォールデン』の鳥の種類はジャーナルと較べると

単純化され、6 月のフィービィ、秋のルーン、春のスパローというふうに印象の統一が図られ、季節の運行を現実の錯雑さとは異質な神話的なものにした。「春」の一節は「季節の神話」を生み出す複雑な芸術化過程の結果でもある。ソローのイコンともいえるモリツグミ(wood thrush)をはじめ全ての鳥は、春、湖に再来し季節の円環構造を完成することになっているが、この一節は多くのジャーナル記述を合成したものである。雲、大気、植物、鳥の親密な有機的連繋による春の再来に、マツの花粉を「硫黄の華」と呼んで、古典的黄金時代(Golden Age)の再開を劇的に創出したものであった。

特にモリツグミは、ジョン・キーツや P. B.シェリーのナイティンゲールに相応するソローの詩神であった。コールリッジにとってナイティンゲールは“most musical most melancholy Bird”であり、キーツにとっては“immortal Bird”であると共にその不滅と合一できない魂の苦悩から「悲しみに満ちた聖歌」となる。またシェリーにとっては「自らの孤独を美しい声で謳い慰める詩人」であった。ソローはこの夜の鳥とは対立的なモリツグミを無垢と力の源泉とし、不可視の朝告げ鳥ロビンや、吟遊詩人と呼ぶタカで新世界の森を構築した。

コールリッジの影響の両義性

ソローの自然観の変質を示す 1850 年以降のジャーナルは、刻明な観察や詳細さを特徴とし、自然と生命への新しいアプローチが窺える。こうした変化の背景にはソローのコールリッジ読書があった。サッテルマイヤーはソローのハーバード大学貸出記録等を含む読書本をリスト化した。ソローが引用する代表的なものとして *The Poetical Works of Coleridge, Shelley and Keats*(1832)、*Aids to Reflection* (1829)、*Table Talk*(1835)、*Hints towards the formation of a more comprehensive theory of Life*(1848)等がある。特にソローは『生命の理論』から「生命の進化」の思想を得、40 年代中葉までの超絶主義的自然観の修正を図ったと思われる。生命が植物から動物へ向かう上昇と拡大の限りない個性化の過程であり、究極的にはコールリッジのいう「自然のある偉大な目的」に向かうという生命観に強い暗示を受け、自然は壮大なドラマを生きるとした。

またソローは風と音の結合の調和を宇宙的音楽と考えるイオリアンハープの賞賛をコールリッジと共有している。フルートの名手であったソローはイオリアンハープも作成し、コンコードミュージアムに展示されている。『ジャーナル』でもイオリアンハープの音楽を「神の聖歌隊」とする。窓辺において風に震えて奏でられる音楽は、有機的宇宙観を寿ぐロマン派詩学の原点であり、コールリッジの“The Eolian Harp” (ソローの読んだのは 1828 年版)にその完全な源泉があるとされてきた。『ウォールデン』「音」の章では、イオリアンハープの思想を章全体に拡大して、サバスの町の教会の鐘の音、周囲の森の呼応、木の葉の震えや羊牧の鈴の音等による“a vibration of universal lyre”の実現を図った。それはまさにコールリッジの“O！the one Life within us and abroad”(l.26)と呼応し、両者には音の伝播を示す共通語彙も顕著だ。

しかしソローの「音」は、音風景の聖なるコミュニティを構築したもので、汽

車の「轟音」や、夜の森のフクローの「陰気なベン・ジョンソン的」叫びも包摂し、夜明けを告げるオンドリへと繋がる。一方コールリッジの「イオリアンハープ」で One life へと統合されるのは、「静と動」「信仰と愛」「倫理的悪の根源」と「神への敬虔な愛」「放浪」から「小屋」への定住等相反する思想的極性であった。従って両者のイオリアンハープにも異質性が目立つ。

ここから『ウォールデン』扉のモットー“I do not propose to write an ode to dejection, but to brag as lustily as chanticleer in the morning, standing on his roost, if only to wake my neighbors up”にある「失意のオード」は謳わないが引き出された。眠っている隣人とは、アメリカ人と共に旧世界、特にロマン派も指すだろう。コールリッジのイオリアンハープは、夜想と「暗くおぞましい悲哀」(「失意のオード」ll.21-22)へと変容したが、『ウォールデン』は目覚めを促す甲高いシャンティクレールの声と暁の星の哲学へと向かっていった。

『失楽園』のパラダイムをアメリカ化する

『初期エッセイ集』には、ミルトンを論じた“L’Allegro & Il Penseroso”があり、哀歌 *Lycidas* は兄の追悼となった『一週間』だけでなく、「池」の始まりでもその有名な最終行を引用している。また最近ミルトンの文学とエコロジーが親和的であったことも論じられている。ソローは失楽園から復楽園への壮大なパラダイムをアメリカに移植した。またアメリカ的自然の中に初期資本主義による物質主義と対抗する楽園性を回復構築しようとする深い改革性もソローには見出される。さらにソローには書評“Paradise (to be) Regained”もある。ソローとミルトンについては、アングレンによる広闊な名著 *The New England Milton* のソローの章で『ウォールデン』を中心に論じてあり、アングレンは、「池」の章を『失楽園』第 IV 巻の構想によりアメリカで実現した楽園とし、ウォールデン湖をモーゼが目指した Castalian の泉なのだと結論する。この分析に倣い本論は「春」をアメリカの復楽園と捉え分析したい。

認識の危機、難破の浜辺への旅とミルトン

ソローの中のミルトンはこれにとどまらない。ウォールデンにいた 1846 年 8 月ソローは本格的な原始林を残すメインの森への旅に出て、以後 3 回の旅で野生の神髄に触れる。メインの森はソローの野生の詩学形成の要となるウォールデンの対照物であった。白人化したネイティヴ・アメリカンの住んでいる本格的な森林への旅が、文明と野生のハイブリッドな人間像をソロー内部に形成する。荒野のナラティヴとしてソローを高名にしたメインの最高峰 5300 フィートのクタードン（雲の山）登山の記述は、後の世代の登山ナラティヴの典型となった名文を残す。「クタードン」を独特にしているのは自らをミルトンのサタンにも模して、むき出しの岩山と対峙する瞬間で『失楽園』第 II 巻を想起して三段階で構築される一節だ。興味深いのはソローのクタードン登頂が、荒野のキャンプ小屋や焼失した森に積んであった板材など荒野消失に関わる風景とは隔絶した、隠された頂きに向かう単独紀行として、荒野の禁を犯す涜神行為として書かれていることだ。

一行からはぐれてやっと一人山頂に達したソローを待っていたのは、全く制御できない次々湧き上がる雲の列と、想像を絶する花崗岩むき出しの「天の石切り場」であった。これが第一段階である。ソローは、「なぜおまえは、おまえの来る時期でないのにやってきたのか」「凍え、飢えて、身震いしながら命を終えるとも聖堂も祭壇もない」という、慈愛の母(Mother Earth)とは似ても似つかない叱責する継母のような荒野の声に打たれ、『失楽園』第 II 巻のサタンの次の詩句"Chaos and ancient Night, I come no spy,/ With purpose to explore or to disturb/The secret of your realm, but my constraint/ Wandering this darkness desert, as my way/Lies through your spacious empire up to Light,(Thoreau 64;MiltonII:970~74)で応える。これはミルトンのサタンが衆愚殿から離れ一人横切る abyss と chaos を原始の山で視覚化したものといえるのではないだろうか。

さらに下山の途中、巨大でより一層荒涼とした焼地に遭遇した。これ以上非情な混沌とした「野蛮で恐るべきもの」はない地に、最も有名な第３段階の文「私は肉体を恐れる。それに出くわすと私はふるえる。私をつかんでいるこの巨人は何ものか。(中略)共有感覚！接するのだ！触れるのだ！私たちは誰なのか。私たちはどこに位置しているのか」(71)が来る。ソローはここで『復楽園』にあるような荒野でのキリストの試練にあい乗り越えたとみてよいであろう。物質としての身体、存在の物質感覚に目覚め、それが常なる霊肉二元論を超えたものであり、自己の方位感覚を喪失させるものであることを認識する。

湖畔を去ったソローは、大西洋の端、アメリカの入り口の砂州と海辺、巡礼父祖の神話の地へ神話の真偽を探求する旅を 4 度 1849 年、50 年、55 年、57 年と繰り返した。最初の旅でセント・ジョン号座礁のニュースを耳にし、陸路コハセットに向かい難破船から打ち上げられた遺体を含むいわゆる難破の遺物(wreckage)にでくわす。そこには人間や魚や鳥や船の部品あらゆるものが打ち上げられ、旧世界から新世界に向かった人々の夢と物語の残骸もあり、作品は冒頭から難破の浜辺、「モルグ」(死体置き場)のストーリーとなる。また砂洲に展開する風景はダーウィンの世界の様相を持つ生命の無限の連鎖を司る生態的原理が支配していた。ソローにはロマン派の面影よりも環境決定論的感覚が窺える。しかし難破の真実がその極点に達するのは、救助されるべき海難者のための浜辺の救助小屋(humane house)の鍵のかかった扉の鍵穴から、盲目の詩人のように中の暗闇を覗き込むときで、ミルトンと聖書への引喩と逆説が駆使される。巡礼父祖とその後継者による現実のアメリカ社会に、ソローは絶望する。コッド岬はソローに、新しい自然認識と再度アメリカ観のパラダイムシフトとを迫る。

参考文献

Anglen, Kevin Van. *The New England Milton: Literary Reception and Cultural* trong, Nancy and Leonard Tennenhouse. *The Imaginary Puritan: Literature, Intellectual Labor, and the Origins of Personal Life*. Berkley, CA: U of California P, 1992.

Buell, Lawrence. *The Environmental Imagination: Thoreau, Nature Writing, and the Formation of American Culture*. Cambridge, MA: Belknap, 1995.

Cole, Phyllis. “The Purity of Puritanism: Transcendentalist Readings of Milton.” *Studies in Romanticism* 17:2 (1978):129-148. http://www.jstor.org/stable/25600126.Jan.9,2018.

Coleridge, S. T. *The Major Works Oxford World's Classics*.Oxford UP, 2008.

———.*Selected Poetry and Prose of Coleridge*. Ed. Donald A. Stauffer. New York: Modern Library, 1951.

Hiltner, Ken. *Milton and Ecology*. Cambridge UP, 2003.

Keats, John. *Complete Poems*. Ed. Jack Stillinger. Harvard UP, 1982.

McColley, Diane Kelsey. “Milton’s Environmental Epic: Creature Kinship and the Language of Paradise Lost, ”in *Beyond Nature Writing: Expanding the Boundaries of Ecocriticism*, ed. Karla Armbruster and Kathleen R. Wallace. Charlottesville VA: UP of Virginia, 2001.

Milton, John. *The Major Works Oxford World Classics*. Oxford UP, 2008.

Moellering, Kurt A. R. *Our Common Dwelling: Henry Thoreau, Transcendentalism, and the Class Politics of Nature*. Boston, MA: Northeastern UP, 2010.

Sattelmeyer, Robert and Richard A. Hocks. “Thoreau and Coleridge's ‘Theory of Life’.” *Studies in the American Renaissance* (1985): 269-284.

———.*Thoreau’s Reading: A Study of Intellectual History*. Princeton UP, 1988.

Shanley, J. L. *The Making of Walden: with the Text of the First Version*. Chicago UP, 1957.

Shelley, P. B. *Shelley’s Poetry and Prose*. New York: Norton, 1977.

Smith, Lorrie. “*Walking* from England to America: Re-Viewing Thoreau's Romanticism.” *The New England Quarterly* 58:2 (1985) 221-241.

Stoll, Mark. “Milton in Yosemite: “Paradise Lost and the National Parks Idea.” *Environmental History* 13:2 (Apr., 2008): 237-74.

Thoreau,Henry David. *The Maine Woods*. Ed. J. J. Moldenhauer. Princeton UP, 1972.

———.*Early Essays and Miscellanies*. Ed. J. J.Moldenhauer Princeton UP, 1975.

———.*Cape Cod*. Ed. J. J. Moldenhauer, Princeton UP, 1988.

———.*The Journal of Henry David Thoreau,* Ed. Bradford Torrey and Francis H. Allen, 14 vols. Boston MA: Houghton Mifflin, 1962.

———.*Walden*. Ed. J. L. Shanley. Princeton UP, 1971.

———.*The Natural History Essays*. Ed. Robert Sattelmeyer. Salt Lake City, UT: Peregrine Smith, 1980.

———.*The Correspondence of Henry David Thoreau*. Ed. Walter Harding and Carl Bode. New York UP, 1958.

新井明「ミルトンと自然」平井正穂編『ミルトンとその時代』(研究社, 1974)所収. 249-70.

———.『ミルトン (CenturyBooks—人と思想)』新装版、清水書院、2016.

伊藤詔子『よみがえるソロー——ネイチャーライティングとアメリカ社会』柏書房、1998.

———.「ソローの鳥とイギリス・ロマン派」『英詩評論』6(1989):78-93.
———.『はじめてのソロー——森に息づくメッセージ』NHK 出版、2016.
エイブラムズ, M. H. 『自然と超自然』吉村正和訳、平凡社、1993.
圓月勝博他『挑発するミルトン—『パラダイス・ロスト』と現代批評』彩流社、1995.
小口一郎編著、植月一郎、金津和美、川津雅江、直原典子、丹治愛、大石和也、山内正一、吉川朗子著『ロマン主義エコロジーの詩学——環境感受性の芽生えと展開』音羽書房鶴見書店、2015.
高山信雄『コウルリッジ研究』こびあん書房、1994.
平井正穂訳『失楽園上、下』岩波書店、1981.
宮西光雄訳『ミルトン英詩全訳集上、下』金星堂、1983.
薬師川虹二『イギリス・ロマン派の研究』世界思想社、2000.

「歴史」の解体

エマソンの自然像と環大西洋思想の文脈

成田雅彦

はじめに

エマソンの自然像を考える時にまずもって重要なことは何故エマソンがこれほど自然に執着したかということであろう。この問いは思いの外単純ではない。もちろん、18 世紀末にヨーロッパではじまったロマン主義の風潮が少し遅れてアメリカに達し、19 世紀初頭は環大西洋世界で自然回帰が謳われた時代であった。したがってエマソンの自然賛美もまた同じロマン主義の文脈を継承したものと当然のように見られてきたのである。それを受けて、エマソンの自然観もまた従来、どういう影響関係によって形成されたかという点に一つの研究の焦点があったように思う。イギリスロマン派から受け継いだ自然観、スウェーデンボルグの神秘思想、ドイツ観念論哲学、イスラムやヒンズーといった東洋の宗教や思想など、そういう世界の様々な思想がエマソンの膨大な読書を通してこのアメリカの詩人思想家に流れ込んだという議論である。しかし、環大西洋の思想はエマソンにロマン主義的自然観を伝えたという以上に、むしろヨーロッパに反逆する自然観を生み出す原動力として作用したのではないか。『自然論』をはじめとした初期のいくつかの自然のエッセイを読み進めていくと、エマソンの自然には独自の目的論的志向があり、それは自然そのものよりも実はそれと対峙する人間や歴史に向けられている。より具体的には、ヨーロッパ的な歴史観の解体が一つの大きなターゲットになっているのである。本論ではそうした観点から自然観を考えてみたい。

新たな自然観から歴史へ

1833 年、エマソンは、ワーズワスやコールリッジというロマン主義詩人訪問という念願を叶えた初めてのヨーロッパ旅行からの帰還に当たり、日記に「自分は自然主義者になろう」と(75)、そして「自然についての自分の本」（78）のことを書いた。しかし、これは長年自分が親しんできたロマン派的自然へのオマージュではない。それは、むしろ訣別の言葉であった。エマソンにとって自然とは人間世界と区別され、時にロマン的精神が逍遥する「異界」ではなかった。自然とは、人間の世界以上に道徳的法則を体現する世界であり、むしろ人間世界が倣うべき手本であった。道徳的真実を自分の第一哲学と呼ぶエマソンにとっては、それからどんどん離反していく因習的な「歴史」的枠組みこそ解体されなければならず、その上で、その因習的存在論を超えた道徳的真実に従った精神の世界を打ち立てること、それをアメリカという「自然の国家」と重ねることが重要であった。

帰国したエマソンは、1836 年の『自然論』をはじめ、いくつかの自然に対するエッセイや講演原稿を書く。同時に、「人間の文化」や「人間の生活」、また「現代」をめぐる連続公演を行い「歴史哲学」をめぐる連続公演も行っている(1836-7

年)。1841 年の『第一エッセイ集』の巻頭エッセイもまた「歴史」であった。その歴史観は、『自然論』同様、極めて特異な歴史観である。19 世紀アメリカにおいて、歴史の欠如がコンプレックスの中核にあったのは言うまでもない。文学者たちがヨーロッパと対比しつつ嘆いたのは、例えばホーソーンが記したように「影も、古色蒼然としたものも、神秘も、絵画的で陰鬱な罪悪もない」(vi) 広大で単純な日の光に包まれたアメリカの単調さであった。そこには壮大な歴史という集積した時間に醸成されたものが欠落しており、それは文学空間が存在しないことと同義であった。対してヨーロッパこそは、そうした豊かな歴史の具現であった。しかし、エマソンはエッセイ「歴史」において「歴史などというものはない。あるのは自伝だけだ」と謎めいた言葉を記している(240)。歴史が先にあるのではない。むしろ普遍的精神というものの方が先にあって、歴史とは単にそれが現実の中に実現されたものに過ぎない。私という個人はこの普遍的精神を宿した存在なのだから、古代ギリシャもローマもイギリスもフランスもすでに私の精神の中に存在していたものだ、とエマソンは言う。それが、歴史とは自伝だということの意味である。こういう考え方は、後年のヘーゲルの描いた普遍的精神の表れとしての歴史を想起させる。ただエマソンの歴史観は、歴史の本質としての時間の集積、形式や因襲の積み重ねといった観念そのものを粉砕する方向に動いている。つまり、ヨーロッパ文明の存立基盤そのものを揺るがそうとしているのである。

流動する自然と歴史の解体

歴史的世界という存立基盤にとって代わるものが自然である。エマソンの自然は、精神化された自然だと言われる。だが、それはただの神秘主義的な異界ではない。それは、本来、人間の精神と同じように躍動する流動体であり、宇宙の巨大な精神をこの世界において体現した物質世界である。エマソンにおいては、自然の法則と人間の道徳法則がまったく重なっている。人間とは、とエマソンは言う。「背後からの声を常に聴いている者のことではないか。しかし、振り返ってみてもその人の顔を決して見ることはできない」と(“The Method”124-5)。その声に深く耳を澄ますとき、その声と一つになろうとするとき、人は豊かで偉大な力の奔流によって満たされる。そして、真実の歴史とは、人類が、ただの個人の集まりではなく、「(その声の) 影響を受けた者たち」(Influenced)、神が分配された者たち、神が多様に形を変えた者たちが作り出す歴史である、と言う(125)。エッセイ「自然の方法」にあるように、自然とは、絶えず動き変転する生命であり、それは一刻たりともとどまることなく、普遍的な精神からの声を映し出して変化していく。エマソンは、そうした背後の崇高な声、無限の神から奔出する生命をそのまま体現する自然のように、人間もまた、そうした無限の神の領域から奔流する聖なる力をそのまま体現する偉大な、天才であらなければならないと言っているのだ。

エマソンは、流動をやめて形式化した「歴史」を否定する。歴史はもともと一人の聖なる個人が神から受け継いだ、あるいは魂の中に宿した記憶が開花して始まったものだとしても、それ以降は、因習的、かつ生命のない形式が繰り返され

て出来上がっていく。やがて人間は、無限の神よりも、有限で因習的な自分たちの制度、社会的制度にがんじがらめになった人間同志を手本として日々の営みを機械的に繰り返すことになる。エマソンは歴史をそう考えている。法律でいういわば判例をひたすらなぞるように、人間が積み重ねてきた歴史という遺産を全面的に否定するという点において、エマソンはヨーロッパ的な保守的思想とまったく異なっている。エマソンは、それがどんなに栄光に満ちた歴史であれ、それを行動の規範とし、その上で「伝統」に連なるような生き方はしない。人間は、そうした因習的な制度よりも、常に無限の神の光源に身を照らされ、行動を促されるべきものであり、それゆえ、従来の歴史は解体されなければならない。それは手本どころか、あらたに生まれる人間（アメリカ人）にとっては、手足を縛る桎梏だからだ。自然こそはそうした束縛から永遠に自由な、常に形を変えて流動する生命体である。なぜ、それを手本として生きようとしないのか。

おわりに

エマソンの自然観はこうした枠組みの中で理解されなければならない。それは、環大西洋世界の中で、ヨーロッパに対する強力な対抗意識を考慮せずには考えられない自然観である。だから、現代の環境保護思想の自然観とそれは基本的に関係がない。しかし、エマソンの生きた時代の人々は、例えば事物としての自然の声を聞こうとした環境論に寄り添うソローよりも、エマソンの自然観に共鳴を感じた。それは、エマソンが当時の自然宗教を支持した人々と同様、目的論的自然観を唱えたからである。それはある時代と状況に特有の自然観であったかもしれない。だが毒をもって毒を制す——ではないが、エマソンはヨーロッパの思想を養分として吸収しつくした挙句、独自の自然観を創造してヨーロッパの歴史という桎梏を破り、自ら、そしてアメリカが精神的に独立する糧とした。拙論では、そうした視点からエマソンの自然と歴史の解体を論じたい。

参考文献

Buell, Lawrence. *Emerson*. Harvard UP, 2003.

Emerson, Ralph Waldo. “Nature (1836),” *Emerson: Essays and Lectures*. Library of America, 1985, pp. 7-49.

---. “The Method of Nature,” *Emerson: Essays and Lectures*, pp.113-32.

---. “History,” *Emerson: Essays and Lectures,* pp. 235-56.

---. “Nature (1844),” *Emerson: Essays and Lectures*, pp. 539-55.

---. *The Heart of Emerson’s Journals,* edited by Bliss Perry, Dover, 1926.

Greenham, David. *Emerson's Transatlantic Romanticism*. Palgrave Macmillan, 2012.

Gura, Philip F. *The Wisdom of Words: Language, Theology, and Literature in the New England Renaissance*. Wesleyan UP, 1981.

Harvey, Samantha. *Transatlantic Transcendentalism: Coleridge, Emerson, and Nature*. Edinburgh UP, 2013.

Hawthorne, Nathaniel. *The Marble Faun: or, The Romance of Monte Beni*. Signet, 1961.

Kern, Alexander. “Coleridge and American Romanticism: the Transcendentalists and Poe,” *New Approaches to Coleridge: Biographical and Critical Essays,* edited by Donald Sultana, Vision Press, 1981.

Miller, Perry. *Nature’s Nation*. Harvard UP, 1967.

Moore, John Brooks. “Emerson on Wordsworth,” *PMLA*, vol. 41, no.1, Mar., 1926, pp. 179-92.

---. “Thoreau Rejects Emerson.” *American Literature,* vol.4, no.3, 1932, pp. 241-56.

Richardson, Robert D. *Emerson: The Mind on Fire*. University of California Press, 1995.

---. “Emerson and Nature,” *The Cambridge Companion to Ralph Waldo Emerson,* edited by Joel Porte and Sandra Morris, Cambridge UP, 2006, pp. 97-103.

Robinson, David. “Emerson’s Natural Theology and the Paris Naturalists: Toward a Theory of Animated Nature.” *Journal of the History of Ideas*, vol. 41, no. 1, 1980, pp. 69-88.

Rossi, William. “Emerson, Nature, and Natural Science,” *A Historical Guide to Ralph Waldo Emerson,* edited by Joel Myerson, Oxford UP, 2000, pp. 101-50.

Rusk, Ralph L. *The Life of Ralph Waldo Emerson*. Charles Scribner's Sons, 1949.

Weisbuch, Robert. *Atlantic Double-Cross: American Literature and British Influence in the Age of Emerson*. Univ. of Chicago P, 1989.

---. “Post-Colonial Emerson and the Erasure of Europe,” *The Cambridge Companion to Ralph Waldo Emerson,* pp. 192-217.

鉄道・自動車・散策・環境意識

大西洋の両岸で

吉川　朗子

ワーズワスと国立公園の創出

2009 年、PBS と共に「国立公園―アメリカが生み出した最上の理念」というドキュメンタリー番組を制作したデイトン・ダンカンは、国立公園制度は、「独立宣言と同じくらいラディカルな理念―国の最も壮大で聖なる場所は、王侯貴族、金持ちのためでなくすべての人のために保全されるべきだ、というラディカルな理念に端を発する」と評する。他方、この言葉を引用しながら、2013 年秋にブリガム・ヤング大学で行われた「ワーズワスとナショナル・パークの創出」という企画展のウェブサイトは、この理念は純粋にアメリカ発祥ではなく、自然についての言説、風景画、ロマン主義思想、環境保護運動など国をこえた対話のなかから生まれてきた考え方であり、その源流にはワーズワスがいる、と主張する。そして国立公園という理念が最初に表明されたものとして、ワーズワスが 1810 年に書いた言葉「見る目、楽しむ心をもつすべての人が権利と関心をもつ一種の国民の財産」(Wordsworth 93)という考え方をあげている(Knopp and Westover)。これは、英米の国立公園制定運動について少しでもかじった者にとってはお馴染みの議論であるが、ここで注目したいのは、「見る目、楽しむ心を持つすべての人」というフレーズが、現在においては「王侯貴族、金持ち」のみならず「一般大衆すべて」という意味に取られるのに対し、1840 年代のイギリスにおいては、狭量なエリート主義と批判されたということである。

イギリス湖水地方における鉄道敷設計画とアメリカ国立公園

1844 年ケンダル・ウィンダミア鉄道敷設計画が出た際、ワーズワスはこれに反対し「見る目、楽しむ心を持つすべての人」のために湖水地方の穏やかな静けさを保全すべきだと主張するが、彼は、教養のない労働者を排除しようとしていると批判された。これまで金銭的に余裕のある人に独占されてきた湖水地方の自然美を都市労働者に開放する民主的な乗り物である鉄道に反対することは、反民主的、排他的であるとされたのである。確かに、ワーズワスの言説には鉄道がもたらすであろうマス・ツーリズムが湖水地方の自然環境、モラル環境を損ねるのではないかという懸念も見て取れ、階級意識、エリート主義的審美観を否定することはできない。しかし、1880 年代に再び鉄道計画が持ち上がった時にはワーズワスの言説が引用され、鉄道が湖水地方の中央部を貫通することは永遠に阻止された。つまり 1880 年代には、たとえアクセスを多少犠牲にするとしても、湖水地方の静穏な自然美を国民全体の財産として守ろうという考えの方が打ち勝ったので

ある。この時には、たとえばH・D・ローンズリーなどは、労働者階級の観光客を敵視するのでなく、北部工業地帯の労働者のためにこそ、湖水地方の自然美は守らねばならないと主張している(Rawnsley 71) 。この 40 年の間にいったいどのような変化があったのか。そこにはアメリカの国立公園制定運動が影響していた。1870～1880 年代のイエローストーン、ヨセミテ、ナイアガラをめぐる公立公園制定をめぐる動きと、イギリス湖水地方における鉄道敷設反対運動との関係を確認する。

アメリカ国立公園と自動車観光

アメリカの国立公園制定にあたっては、鉄道さらには自動車による観光もある程度認められた。デイヴィッド・ラウターは、「ジョン・ミューアは国立公園保護に対する政治的支持を拡大するためにも、国立公園を経済的に成長させるためにも自動車観光を認めた。エマソンが自然と鉄道の共存は可能だと見ていたように、ミュアは自然と車の共存は可能と見たのだ」（Louter 26）と述べている。国立・州立公園（保護区）は、自然を乱開発から守るために観光を認めたのである。ここでは、道路は原初の自然と対立するものでなく、原初の自然のよりよい理解するための手段とみなされた。そして、国立公園は環境保護と観光との両立を図る手段とみなされたのである。

ニューヨークのセントラル・パークを設計し、ヨセミテ、イエローストーン国立公園制定運動に関わり、ナイアガラ州立公園を設立した景観設計者フレデリック・ロー・オルムステッドは、観光客に景色を楽しんでもらうことを意図して散歩道を整備したが、それはまるで風景庭園のなかの小道のようであり、ここにはイギリスからの影響があると考えられる。

1908 年に初めて自動車の流入を認めたマウント・レイニア国立公園をはじめ、20 世紀になると国立公園内で自動車のためのパーク・ロードが整備されたが、それは自然風景を守りつつ観光客を愉しませるためのものであった。パーク・ロードが国立公園の風景を作り、訪れる人に自然をどのように体験するかを指南した、とラウターは述べている。アメリカにおける自動車の大衆化は、国立公園の発展、そして国民の環境意識を高めることに寄与したという。ラウターは、「自動車は国立公園を大衆化し、国立公園をより多くのアメリカ人に対して開くことで真に民主的なものとした。車は国立公園を、自然風景を楽しむ場とし、資源開発に使われることから守った。自動車のおかげで国立公園は観光資源となり開発を免れた」（Louter 13）と述べている。

イギリスにおける自動車旅行とロマン主義的散策の再評価

自動車の登場が自然美の発見、環境意識の高まりに繋がるということはイギリスにおいても観察できる。鉄道と異なり自動車は田舎の隅々にまで入っていける。それは田園破壊の脅威となると同時に、田園の魅力を広く一般に知らしめ、これを守ろうという動きへと繋がったのだ。

戦間期に盛り上がったアウトドアブームは、ロマン主義的な散策の再評価をも

たらした。ワーズワスが歩くことを称揚した際、それはエリート主義と批判されたが、自動車時代になると、これは大衆的な娯楽として認められるのである。散策の再評価にあたってはワーズワスだけでなくハズリットやソロー、ホイットマン、ジョン・バロウズ、レズリー・スティーヴンズなど、英米の歩く文人たちが持ち出される。自由、独立精神、自然との一体感、心身の健康といった歩行のもつ利点を礼賛するこれらロマン主義的な文人たちの書いたものが再びもてはやされたのだ。

なかでも、ホイットマンの「開かれた道の唄(The Song of the Open Road)」はよく引用されたが、道路は万人に平等に開かれており、全ての人に自由と独立、心身の健康を保証するといった民主的な歩行精神は、自動車の大衆化のおかげでより多くの人々が休暇を楽しみに田園地帯へ出かけられる時代になって、本来的な意味が確立したと言えるだろう。この民主的な歩行精神という点では、ワーズワスの主張した「通行権（right of way)」「歩く権利」も、19 世紀末～20 世紀初頭の遊歩道保護運動で繰り返し取り上げられた。田舎を歩き、自然とじかに触れあうことの楽しみが、真の意味ですべての人に求められ、経験されるようになるには、鉄道、自動車といった輸送手段の発展が必要だったのである。

歩行の詩学と自然地保護運動

本稿では、ワーズワス、ソロー、ホイットマン、バロウズらの歩行の詩学に注目し、それが　19 世紀半ばから 20 世紀半ばに至る大西洋両岸の自然地保護運動を担ったオルムステッド、ジェイムズ・ブライス、ローンズリー、G・M・トレヴェリヤン、H・H・シモンズらの言説・行動にどう影響し、国立公園制定に繋がっていくのかを見ていく。散策・歩行礼讃がもつ意味の変化、鉄道や自動車と自然地保護との関係の変化を辿り、観光・アクセス権と自然地保護との両義的で逆説的な関係について考察する。湖水地方の自然環境が、真の意味で「見る目、楽しむ心を持つすべての人」にとっての財産とみなされ、その保護の必要性が認められるようになるためには、ワーズワスの反対した鉄道の力、そして自動車の力が必要であった、ということを論じる。

参考文献

Burroughs, John. ‘The Exhilarations of the Road.’1873. *The Art of Seeing Things*. New York: Syracuse University Press, 2001. 39-48.

---. ‘In Wordsworth Country.’ *Fresh Fields*. Edinburgh: David Douglas, 1885. 208-221.

Duncan, Dayton. ‘The National Parks: America’s Best Idea.’ PBS,2009.

Hazlitt, William. ‘On Going a Journey.’ *Table Talk*. 1822. New York: AMS Press, 1967. 181-89.

Hall, Melanie. ‘Niagara Falls: Preservation and the Spectacle of Angle-American Accord.’ *Towards World Heritage: International Origins of the Preservation Movement, 1870-1930*. Ed. Melanie Hall. Farnham: Ashgate, 2011. 23-44.

------. ‘American Tourists in Wordsworthshire: From “National Property” to “National Park.”’ *The Making of a Cultural Landscape: The English Lake District as Tourist Destination, 1750-2010*. Ed. John K. Walton and Jason Wood. Farnham: Ashgate, 2013. 87-112.

Kopp, Maggie and Paul Westover. ‘Wordsworth and the Invention of the National Parks’. http://exhibits.lib.byu.edu/wordsworth/

Louter, David. *Windshield Wilderness: Cars, Roads, and nature in Washington’s National Parks*. Seattle: University of Washington Press, 2006.

Olmsted, Frederick Law. *Civilizing American Cities: Writings on City Landscapes*. Ed. S.B. Sutton. 1971. New York: DA Capo Press, 1997.

---. ‘Yosemite and the Mariposa Grove: A Preliminary Report.’ 1865. Digitized by Dan Anderson, www.yosemite.ca.us

Rawnsley, H.D. ‘The Proposed Permanent Lake District Defence Society.’ *Transactions of the Cumberland Association for the Advancement of Literature and Science* 8 (1882–1883): 69–81.

Readman, Paul. ‘Walking and Environmentalism in the Career of James Bryce: Mountaineer, Scholar, Statesman, 1838–1922. *Walking Histories, 1800–1914*. Ed. Chad Bryant et al. London: Macmillan, 2016. 287-318.

Scheper, George L. ‘The Reformist Vision of Frederick Law Olmsted and the Poetics of Park Design.’ *The New England Quarterly* (1989): 369-402.

Stephen, Leslie. ‘In Praise of Walking.’ *Studies of Biographer*. Vol.3. London: Duckworth, 1902. 265-71.

Symonds, Henry Herbert. *Walking in the Lake District*. London: Alexander Maclehose & Co., 1933.

Thoreau, Henry David. ‘Walking.’ 1851. 1862. New York: Harper One, 1994.

Trevelyan, G. M. ‘Walking.’ *Clio, A Muses and Other Essays, Literary and Pedestrian*. London: Longman, 1913. 2nd Edition, 1930. 1-18.

Whitman, Walt. *Leaves of Grass*. 1856. Ed. Emory Holloway. New York: Dutton, 1947.

Wordsworth, William. *Guide to the Lakes*. Ed. Ernest de Selincourt. 1906. New preface. Stephen Gill. London: Frances Lincoln, 2004.

---. *The Prelude. 1799, 1805, 1850*.Ed. M.H. Abrams, Jonathan Wordsworth, Stephen Gill. Norton Critical Edition, 1979.

Wright, Patrick. *On Living in an Old Country*. 1985. Oxford: Oxford University Press, 2009.

鯨と海のエコロジー

イギリスとアメリカ

植月惠一郎

はじめに—『白鯨』先行研究

サイードが『文化と帝国主義』でエイハブに言及し、アメリカ人の世界探求の寓意的表象であるとするようなものまで含めば、『白鯨』批評は、無数とも言える膨大な量に膨れ上がり、その大海を前に呆然とするばかりだ。

ウィーヴァーによるメルヴィル最初の伝記（1921）から、アメリカの文明社会に対する反逆および幻滅の作家というイメージが形成された。ロレンスの『アメリカ古典文学研究』(1923）では、白鯨はキリストの聖性をも含む人間存在の聖なる集合的無意識の象徴であり、それをエイハブたる、欧米の近代文明社会に生きる白人の自我意識の体現者が狂信的に狩ろうとする物語と解釈される。多くの批評が、主軸となる白鯨とエイハブの追跡と戦いに注目する中、マシーセンは、語り手イシュメイルの存在意義を強調した。

精神分析的批評では、白鯨はフロイト的超自我の象徴であり、エイハブは自我（イド）に相当し、片脚を奪われた船長は、抑圧的超自我に激しい戦いを挑む反逆的自我の人であることは容易に推測できる。ピークォッド号にでさえ、キリスト教的意識の残虐さに対する未開人（アメリカ原住民）の激しい復讐心が満載されているという指摘もある。

ハロルド・ブルームの『白鯨』論では、エイハブはグノーシス主義の至高神に祈りを捧げ、旧約の神の偽りの創造に先行する始原的深淵である異教の神的なものを追求するなどとしている。他にも現象学的アプローチもあり、また構造主義的なものだと、作品構造を線と円で説明しようとする。エイハブの白鯨攻撃は直線的、相対主義者イシュメイルの懐疑主義は円環的である。

脱構築的な批評だと、この作品は何ら構造など持たず、破片が散乱し混在しているだけで、百科全書的傑作でもなんでもなく、テクストがのたうちまわっているだけであると主張して憚らない。もし世界文学史上の傑作と呼ぶ批評があるとすれば、それはどんな妄想にとらわれているのだろうかと疑問を投げかけるものもある。

エコロジーとエコノミー—牧歌と農耕詩

少しでも環境批評的なものに言及するなら、1970年代のゼルナーの『海のマストドン』まで待たねばならない。白鯨は、宇宙に遍在する悪の化身などではなく、畏怖心が喚起する自然の力であると同時に人間の愛情の対象になり得る存在、同胞的存在と言う。エイハブについては自然を征服し破壊し搾取すべき敵対者と見なし、イシュメイルは鯨を人間化することでエイハブの悲劇的過誤を回避する役

回りらしい。

本論では、有名な研究書であるのに、『白鯨』批評論の文脈ではほとんど見かけないマークスの『楽園と機械文明』(1964) から始めたい。『白鯨』に登場する様々な「機械」のイメージは、捕鯨という狩猟を実践するための必需品で、「紛れもない殺戮と屠殺」という暴力を巧妙に隠蔽し、一方で、文明化された西洋社会を顕現させるために用いられているとする。イシュメイルにとって銛網は、鯨を消費するという人間の避けがたい必要の印であり、人間に対する鯨の恐ろしい支配力の印でもある。

マークスの〈楽園〉は牧歌的なものでもあり、結局、本論では二つのことを指摘することになる。つまり牧歌的なものと農耕詩的なもの、とくにイタリア・ルネサンスのサンナザーロ以来の漁労に関する指南書的なものがほどよく融合した作品であること、つまり、「捕鯨船がイシュメイルのイェール大学であり、ハーバード大学であった」というわけだから、捕鯨産業に関する優れたテクストでもあろう。アメリカ捕鯨のピークが 1835 年頃とも 1846 年とも言われ、51 年に『白鯨』が出版され、その後 59 年にはペンシルベニア州で石油が発見され、以後急速に鯨油の需要が激減していくという経緯の中で、『白鯨』は鯨のエコロジーとエコノミーの書であり、同時に捕鯨批判の書であるというのがほぼ本論の結論となる。

ブリテン島とサマー諸島の比較—ウォラーの場合

エドモンド・ウォラーの「サマー諸島の戦い」の数行は、『白鯨』の冒頭に付された鯨に関する引用箇所の「抜粋」でも言及されている。そこで紹介されているのは、聖書では「ヨナ書」など、古典ではプリニウスらに続き、モンテーニュ、シェイクスピア、スペンサー、ダヴェナントらで、次いでウォラーのこの部分の紹介となる。

ウォラーのこの作品は、サマー諸島すなわちバミューダ諸島のとある入り江に暴風雨により迷い込んだ母子鯨と島民たちの戦いを描いたものだ。その「抜粋」でも言及されているのは、「鉄の殻竿をもつスペンサーのタラス」に言及された箇所で、仔鯨でさえ捕らえられまいと重々しい尾鰭で島民たちを破滅させんと威嚇している。そのたった一打ちで小舟はばらばらに打ち砕かれてしまう（ウォラー「サマー諸島」第 Ⅲ 部)。

ここで、「タラス」とは『妖精の女王』第五巻に登場する正義の騎士アーティガルの従者で、法の番人にして正義の執行者で、鉄の殻竿で当たるものすべてを薙ぎ倒す強者のことだ。重要なのは、もしスペンサーに倣うなら、巨大な鯨に立ち向かう島民たちと、悪しき竜に挑む騎士という図式になるはずだが、ここでは逆転していることだ。つまり、仔鯨の尾鰭こそ正義の鉄槌と言えよう。もしスペンサーを意識していたとすれば、先行詩人の影響の不安を克服しようと試みているとも言えようが、ウォラーは鯨こそ正義と解釈したに相違ない。嵐のせいで偶然浜辺に漂着しただけで、何ら悪意を持たないはずの鯨と、その獲物で利得や名誉の欲望に駆られた島民と、エコロジカルに見て、いずれの側に正義があるかは言うまでもないだろう。

さて楽園的牧歌的要素にも触れておこう。「温和な春は、イギリスでは会釈するだけ」だが、その春もこの島には住みつき、一年中島民に言い寄っている。熟した果実と花が同じ一本の木に宿り、「実を与えると同時に実を付けることも約束する」。大気はかぐわしく、気候は温和で、そこの住人は病を知らずに暮らし、天寿を全うするのだ。神は「万物が最初に創造された姿をみせるために」、たしかにこの地を呪われぬように定められたのだった。しかしこの長閑な風景の背後には、そこが奴隷貿易の一角を担う植民地という厳然たる事実がある。ウォラーは楽園表象と鯨と島民の戦いを描くだけで、その他に関してはまったく触れていない。

一方、『白鯨』では、ニューベドフォードは、「乳と蜜の流るるカナンの地とまでは言わぬにしても、油流る土地、玉蜀黍と葡萄酒に恵まれた土地ということはできる」(『白鯨』6 章)。この豊かさはどこから来ているのかと言えば、「銛を打ち込まれ、海の底から引きあげられたものが、すべてことごとくこの地にもたらされたのだ」(6 章)と人間の繁栄の背後には多くの鯨の犠牲があることを十分に意識している。

鯨と海と地球

捕鯨においては、自然と人間の関係が主に技術的なものであることをイシュメイルは発見する。人間は、技術に裏打ちされて便利な文明社会で穏やかな理想的生活を営んでいるが、その下には、自然への依存、略奪、搾取という基盤となる局面があることを、彼は暴露する。

また、「世界中の最果ての海にまで入り込み、地球上の全大陸の沿岸で、無数の銛と槍を投擲している」今、「これほどの徹底した追跡とこれほどの情け容赦のない大殺戮に、巨鯨(リヴァイアサン)はいったいいつまで持ちこたえることができるのだろうか」と疑問を呈している。「しまいに鯨は、海から姿を消すのではないか、そして最後の鯨は、最後の潮を噴いて、たなびく潮煙とともに雲散霧消するのではないか」(『白鯨』105 章)と鯨の絶滅さえ危惧している。

さらに、鯨の油脂の燈の下で鯨の肉を食べる行為は、「ひどいことをした上になおひどく侮辱することになる」(『白鯨』65 章)ものであり、「鵞鳥虐待防止協会の会長が公式回覧文書を起草するときいかなる鳥の羽ペンを使ったでしょうか」(65 章)と問いかけ、「羽ペンを禁止し、もっぱら鉄ペンの使用を決議したのはほんの一、二ヶ月前のことだったではありませんか」(65 章)と非難している箇所もある。

一方で、鯨の生息する驚異と神秘と混沌の海が存在する。海こそが、嵐であり、破壊原理、混沌の淵源であった。この海そのものが文彩により、海の怪物として表象されたのだ。海、混沌、無秩序、破壊、暴力などなど、海の怪物は聖書に源をもつ深海の怪物〈リヴァイアサン〉と一致していることからも肯ける。実際、モービー・ディックの場合、実在の白鯨モカ・ディック(Mocha Dick)に由来し、ある研究によれば、mocha は mother-sea を意味するという。

水への興味は第 1 章からすでに示されていて、「だからあのナルシスの物語はいよいよ深い意味を帯びてくるのだ」とまず古典のナルシスを紹介するのだが、環

境批評を実践しようとすれば、この一節からアメリカン・ナルシスに向かうのではなく、水そのもの、そこに反映された「幻」へ向かわねばなるまい。「文字に残された世界最初の船が浮かんだ海とは、全世界を水底に沈めた海であった。その海と同じ海が今眼前にうねっている。…人よ、ノアの洪水は今なお退いていないのだ。この美しい世界の三分の二は洪水に浸かったままなのだ」。(『白鯨』58 章)

そして「あのアイルランドは、恐るべき銛打ちたるジョン・ブルの仕留め鯨ではないのか。あのテキサスは、使徒面した槍使いのブラザー・ジョナサンの仕留め鯨ではないのか」(『白鯨』89 章) と問い、一方、「1492 年までアメリカは離れ鯨であった」し、インドもイギリスが支配するまでは離れ鯨であった。「大いなる地球、これも離れ鯨ではないのか？」(89 章) と問うとき、地球自体を仕留め鯨としてしまいたい人間の欲望と離れ鯨のままにしておきたいという願望の二律背反を読み取ることができる。いずれにしても、地球をも鯨化してしまおうとするテクスト、これこそが『白鯨』に他ならない。

おわりに

2018 年 2 月 17 日ロンドンで開催されたロンドン国際映画制作者祭で、八木景子監督が長編ドキュメンタリー部門最優秀監督賞を受賞した。受賞作品は、捕鯨を肯定的に捉えたドキュメンタリー映画《ビハインド・ザ・コーヴ》(2015 年公開) であり、この映画は、和歌山県太地町のイルカ漁を批判して 2010 年にアメリカ・アカデミー賞長編ドキュメンタリー映画賞を受賞した《ザ・コーヴ》(ルイ・シホヨス監督) に反論した形になっている。

捕鯨／反捕鯨に翻弄されているのは人間よりもむしろ、鯨そのものに違いない。これからどういう方向へ向かっていけばいいのか、『白鯨』および『白鯨』批評が有効な指針形成に寄与してくれることを願う次第である。

参考文献

Chambers, A. B. *Andrew Marvell and Edmund Waller: Seventeenth-century Praise and Restoration Satire*. Pennsylvania State University Press, 1991.

Chernaik, Warren L. *The Poetry of Limitation: A Study of Edmund Waller*. Yale University Press, 1968.

Gale, Robert L. *A Herman Melville Encyclopedia*. Greenwood Press, 1995.

Gravil, Richard. “The Whale and the Albatross,” *The Wordsworth Circle*. 28:1 (WINTER, 1997), 2-10.

Marx, Leo. *The Machine in the Garden: Technology and the Pastoral Ideal in America*. 1964. Oxford University Press, 1967.

Leroux, Jean-François ed. *Herman Melville's Moby-Dick: A Documentary Volume*. Gale, 2009. Rollyson, Carl and Lisa Paddock ed. *Herman Melville A to Z: The Essential Reference to His Life and Work*. Facts on File, 2001.

Zoellner, Robert. *The Salt-Sea Mastodon: A Reading of* Moby-Dick. University of California Press, 1973.

海老澤豊「ウォラーとマーヴェルのバミューダ島」、十七世紀英文学会編『十七世紀英文学と自然』金星堂、123-42、2002.
大橋健三郎編『鯨とテキスト—メルヴィルの世界』国書刊行会、1983.
奥井智之『恐怖と不安の社会学』弘文堂、2014.
越智敏之『魚で始まる世界史—ニシンとタラとヨーロッパ』平凡社、2014.
河島弘美『動物で読むアメリカ文学案内』岩波書店、2012.
北川悌二『モービー・ディック辞典』北星堂書店、1981.
ゲイル、ロバート・L『ハーマン・メルヴィル事典』福士久夫訳、雄松堂出版、2008.小林弘「リヴァイアサンは海獣か人造人間か—ホッブズのリヴァイアサン解釈」、英米文化学会編『英文学にみる動物の象徴』彩流社、85-130、2009.
酒本雅之『沙漠の海ーメルヴィルを読む』研究社出版 1985.
塩田弘ほか編『エコクリティシズムの波を超えて—人新世の地球を生きる』音羽書房鶴見書店、2017.
柴田元幸「『白鯨』あるいは怒れるナルシス」、『アメリカン・ナルシス—メルヴィルからミルハウザーまで』2005.東京大学出版会、3-24、2017.
杉浦銀策『メルヴィル—破滅への航海者』冬樹社、1981.
杉浦銀策「『白鯨』批評史—テクスト読みの迷路」、千石英世編『白鯨』ミネルヴァ書房、11-30、2014.
千石英世編『白鯨』ミネルヴァ書房 2014.
千石英世『白い鯨のなかへ—メルヴィルの世界』1990.彩流社、2015.
高野一良「船上のリアリズム—鯨捕りたちと『白鯨』」、中央大学人文科学研究所編『メルヴィル後期を読む』中央大学出版部、3-21、2008.
巽孝之「モビイ・ディックの世紀(特集『白鯨』ウォッチング)」、『英語青年』147(10), 602-605, 2002-01.
巽孝之『「白鯨」アメリカン・スタディーズ　理想の教室』みすず書房、2005.
中央大学人文科学研究所編『批評理論とアメリカ文学—検証と読解』中央大学出版部、 1995.
寺田建比古『神の沈黙—ハーマン・メルヴィルの本質と作品』1968.沖積舎、1982.
中島顕治『魚つりと鯨とりの文学』彩流社、1993.
中村紘一『メルヴィルの語り手たち』臨川書店、1991.
西谷拓哉「『白鯨』の風景」『英語青年』 153(12), 740-744, 2008-03
西山智則『恐怖の表象—映画／文学における〈竜殺し〉の文化史』彩流社、2016.
橋本安央「『白鯨』の海、棄子(すてご)の夢 (特集 海と国家)」、『アメリカ研究』(46), 19-32, 2012.
フィルブリック、ナサニエル『白鯨との闘い』相原真理子訳、集英社、2015.12；『復讐する海—捕鯨船エセックス号の悲劇』相原真理子訳、集英社、2003.12
福岡和子『変貌するテキスト—メルヴィルの小説』英宝社、1995.
福岡和子『「他者」で読むアメリカン・ルネサンス—メルヴィル・ホーソーン・ポウ・ストウ』世界思想社、2007.

藤江啓子『空間と時間のなかのメルヴィル—ポストコロニアルな視座から解明する彼のアメリカと地球(惑星)のヴィジョン』晃洋書房、2012.
藤江啓子「ロマンティックな海からグローバルな共有地としての海へ—ロングフェロー、メルヴィル、そしてイアン・ウェッド」、『国際比較研究』第 12 号、115-35、2016.
藤江啓子『資本主義から環境主義へ—アメリカ文学を中心として』英宝社、2016.
星野勝利「タヒチ島をめざして—『白鯨』と予型論 (<特集>メルヴィル『白鯨(モービー・ディック)』論)」、『アメリカ文学評論』1, 8-17, 1978.
星野勝利「新世界との対峙—ニューイングランド文学とバイオリージョナリズム」、『岩手大学英語教育論集』(10), 101-115, 2008.
牧野有通『世界を覆う白い幻影—メルヴィルとアメリカ・アイディオロジー』南雲堂、1996.
牧野有通「多文化主義から見るメルヴィルのアメリカ」、『明治大学人文科学研究所年報』46、49-50、2006.
丸山健二『白鯨物語』眞人堂、2013.
森田勝昭『鯨と捕鯨の文化史』名古屋大学出版会、1994.
八木敏雄『「白鯨」解体』研究社出版、1986.
鷲津浩子, 宮本陽一郎編『知の版図－知識の枠組みと英米文学』悠書館、2007.

メルヴィルとマテリアル・エコクリティシズム

創造性を中心に

藤江啓子

トランスアトランティックに捉えるメルヴィルの創造性

「神、人間、自然の三位一体は 19 世紀の宇宙の中心であった。自然自体は芸術、科学、そして宗教という別の三位一体によって照らされていた」(47) という、バーバラ・ノヴァックの指摘通り、19 世紀は「創造」(Creation) をめぐって、揺れ動いた時代であった。1859 年、チャールズ・ダーウィンが『種の起源』を発表し、科学が生物の進化を証明した。それでもなお、神の創造力を信じる者は多かった。

文学においても、イギリスロマン派は、神の側の創造力(creative power)と人間の側の想像力 (imagination) が一つとなり、自然を作り出した。ハズリットは「ガスト」「シンパシー」「パッション」を、キーツは「同一化」「美と真実」を、シェリーは「愛」を、そして代表的自然詩人、ワーズワスは「力強い感情の自発的流出」を提唱し、主体から流れ出る想像力を謳歌した。

M.H. エイブラムズはこの主観的な力、すなわち、魂の美しさ、崇高さ、そして偉大さをロンギノス (Longinus) に遡ると論じる (72)。例えば、『崇高について』からの次の一節は後のロマン派に先行すると考えられる。「我々の魂は真のサブライムによって高揚する。それは誇り高き逃避である。そして喜びと誇りに満たされる。あたかもそれが聞いたことを作り出したかのようだ」(65)。詩人の側の崇高な主観的な力と同時に読者や聴衆の主観的な力に訴えかける力である。

現実からの誇り高き逃避として捉えられた崇高な魂の投影である自然もまた崇高な景観を呈する。なかでも魂と自然との交流を描く詩を多く書いたワーズワスの『序曲』の次の一説はこのサブライムを軸として神・人間・自然の三位一体を良く表したものと思われる。

> 私は一個の世界を持っていた。それは私のものだった。
> 私がその世界を創造したのだ。なぜならそれは私と私の心を見通してしまう神だけのために、生きている世界なのだから。 (III, 142-45)

人間の側の想像力は神の側の創造力と一つとなり、世界を、そして自然を見通す透明なヴィジョンとなるというこの一節は、同時代のアメリカのロマン主義者エマソンの『自然』からの次の一節と重なるとみてよいだろう。

> むき出しの大地に立って、私の頭が気持ちのいい大気に洗われて無限の宇宙にまで高められると、どんなにつまらない自己中心癖も消える。私は透明な一個の眼球になる。いまや私は無、私にはいっさいが見える。普遍的存在の

流れが私の中をめぐり、私は神の眼目となる。 (6)

経験を超え、人間は直観によって真理を知りうるというエマソンの超越主義を表す代表的な一節である。キーツはワーズワスの想像力を「自己中心的崇高（egotistical sublime)」と評した。その意味において自己中心的なものを抹殺するエマソンとは一線を画する。しかし、大きな主観的精神力の働きにより、ワーズワスもエマソンも自然と神を同一視し、神の創造力を自然のなかに見出したのである。エマソンはユニテリアンの牧師であり、キリストの神性に異議をとなえ、父と子と聖霊の三位一体を否定したことでも知られる。父なる神と自然の一体を主張する神秘主義の立場をとり、神と人間と自然という新たな三位一体を確立したのである。

今日地球は地質学的に人新世(anthropocene)の時代に入ったと議論されている。人間活動が地球環境に及ぼす影響を意識し、環境保護の立場からロマン主義を論じる研究が進められている。ティモシー・クラークは、ワーズワスが最初の産業社会におけるエコロジカルな抵抗をしているのか、あるいは、彼が描く神が宿るとされる自然は「精神的な力」であり、一種の「高慢な人間中心主義」（63）なのかと問いかける。エマソンのすべてを見通す超越主義に対しても「土地の精神的領有で土地そのものからは眼差しをそらすもの」（51）であると批判する。

ジョナサン・ベイトは『ロマン派のエコロジー――ワーズワスと環境保護の伝統』の「日本語版序文」において、「ワーズワスを通じて、・・・エマソンよりはむしろソローに顕著なアメリカのロマン派の伝統を通じて、我々はポスト工業化時代の人間社会が、環境と再び結びつくことの意味を考えていけるのではないか」（7）と述べ、ワーズワスをエマソンよりはソローに近づけ、より実際的なワーズワスを見出そうとする。そして現実逃避としてのワーズワス批評に異議を唱えている。

近年、文学研究はさらに現実的となり物質としての環境に着目するようになった。マテリアル・エコクリティシズム（物質的環境批評）である。マテリアル・エコクリティシズムでよく取り上げられるアメリカの古典作家に、ウォルト・ホイットマンとハーマン・メルヴィルがある。両者とも人間の物質としての肉体や自然環境の蘇生力／創造性に着目し、人間の文化と自然を相反するものではなく、相互作用、結合された「メッシュ」として捉えられるべきものとする。そして、我々が住んでいる世界を純然たる外部ではなく、生きたもの、物語として捉える。

ウィリアム・スタインはアメリカのメルヴィルとイギリスの自然詩人ワーズワスとの類似性を見出し、メルヴィルの後期の詩『雑草と野草――　一本か二本のバラと共に』を「蛭取りの日誌」(151）のようだと述べる。メルヴィルがワーズワスの詩に註釈を付けたとする Tomas F. Heffernan の研究、『序曲』第 10 巻がメルヴィルの『戦争詩集』(1866)に収められた“The House Top” に影響を及ぼしたと論じる Robert A. Duggan の論文、などもあり、彼がワーズワスの詩になんらかの関心を持ったことは確かである。

そして、創造性（creativity）という観点から、メルヴィルは彼らロマン主義の

基本的なスタンス「神、人間、自然の三位一体」を意識しながら、否定するような書簡をホーソーン宛に残している。

> 私、神、自然、と言ったとたんに腰掛けから飛び降りて、梁から首をつるんだ。その言葉が絞首刑執行人だ。神を辞書から取り出せ、そうすれば路上に神を持てるだろう。　（*Correspondence* 186）

メルヴィルは神を天から、あるいは遠くの山をはじめとする景観から引き寄せ、かつ引き摺り下ろした。ハンス・バーグマンは彼の著書に『路上の神』（*God in the Street*）というタイトルを与え、副題『ペニー本からメルヴィルに至るニューヨークでの著述業』が示す通り、ニューヨークの印刷文化と文学の市場経済下におけるメルヴィル作品の位置づけを行っている。いずれにせよ、直観や唯心的なものより、現実的で即物的なものを思わせる。人間や自然が神の高みに上がるのではなく、神が人間界や自然界に下りてくるのである。

あるいは、神を上位、人間や自然を下位に置くヒエラルキー的秩序ではなく、すべてを水平化する思考である。超越的ではなく、現実世界と人間の生きた実際の経験の関係である。サンボーンも次のように指摘する。

> 作品のあらゆるところでメルヴィルはメルロ・ポンティが「世界と我々の生活の叙述に先立つ結合、経験の生きた関係」と呼ぶものを確信する。そこから「私」「神」「自然」といった概念が形成される。（13）

メルヴィルにとって創造（性）とは天上の神から与えられるものではなく、また主観的なものでもなく、人間と世界との生きた関係から作り出されるものなのである。例えば、文化と自然、エゴ（自己）とエコ（環境）の相互作用と相互変容である。それは生成のプロセスであり、文学的創造性となって『白鯨（*Moby-Dick*）』(1851) の次のイシュメルの語りに例をとることが出来るとザフは指摘する（63-64）。

> 驚異の世界の大きな水門が開き、私の目的に私を揺らす野蛮な思いのなかで、私の内奥の魂のなかに浮いていく、クジラが果てしなく行進し、その中心に大きな覆った幻が雪の丘のように現れる。（5）

メルヴィルの『白鯨』は語り手イシュメルが文明の憂鬱な日常生活を逃れ、海の旅に出る話であるが、そこに人間界を超えて自己発見の未知の世界が開く。半ば現実的で半ば夢のような海の旅において、イシュメルは白鯨に出会う。それはエイハブの人間中心的な生物嫌悪の対象であるが、イシュメルの深い自己の生きた中心である。この小説の創造的エネルギーの出現の原風景において、自然と自己、外の世界と内なる世界のイメージは、互いに理解される。人間を美的目的に進ませる創造的エネルギーは人間を超えた生命の形態や変容の下にある同じ力となる

とザフは言う（63-64）。

また、メルヴィルにとって創造とは生殖を意味する。例えば、白鯨は抹香鯨で、英語では “sperm whale” である。”Sperm”とは精液の意味であり、鯨の脳油が精液に似ていることに由来する。D.H.ロレンスも白鯨を「男根的存在」（169）とする。そうすれば、白鯨は人間と同様の生殖能力、すなわち文字通り創造力を持つことになる。

鯨の頭部の脳油（sperm）を汲みだしていたタシュテゴが鯨の頭もろとも海に落ちたとき、クイーックェグが勇敢にも海に潜り、タシュテゴを救出する場面がある。足からではなく頭から救出するやり方は「産婆術」（344）、タシュテゴの救出は「出産」（344）とされる。ここにおいて鯨の頭部は人間の子宮に譬えられている。文字通り、子宮内の精液（sperm）という物質の作用が出産（創造）をもたらすのである。それは神聖なものであり、 “sperm”（脳油／精液）のある鯨の子宮としての頭部は「聖域」（344）とされる。そして、自然界（鯨）と人間との境界は曖昧になり、両者の結合が語られる。

第 95 章における鯨のペニスの皮で法衣を作るエピソードでは、性を罪悪視するキリスト教とキリスト教聖職者が“archbishoprick” と皮肉られている。“archbishopric”はカトリックの大司教の意味であるが、”prick”と最後に“k”の文字を入れ、「男根」の意味を持たせ、皮肉っているのである。

神の被造物であるアダムとイヴが犯した罪は、神の命令にそむき禁断の木の実を食べたことである。それゆえに彼らは楽園を喪失し、彼らの犯した罪は性交によって受け継がれると言われる。人間を創造する（生み出す）のは人間の性行為によるものであり、それは神による天地創造を否定するものであり、キリスト教が性を罪悪視する理由である。メルヴィルは、ダーウィンの『ビーグル号航海記』（1839）を読み、『白鯨』においては、鯨の化石の発見について述べるなど生物の進化に科学的な関心を示した。同時に性行為を創造・再生の源泉として認識し、罪悪視することもなかった。

メルヴィルの肉体的／物質的関心について、D.H.ロレンスは「メルヴィルのなかで、純然たる宇宙の基本要素のなかの生きた肉体的知識が、赤裸々に動く。全く肉体の振動する敏感さで、驚くべき無線局のように、彼は外部の世界の作用を記録する」（155）と述べる。さらにそれを宇宙の物質的基本要素に帰するものとして、メルヴィルは「人間の行いよりも、物質の不思議な動きや衝突に魅せられたようだ。・・・彼が本当に扱っているのは、物質の基本要素なのだ。彼が描いたのは基本要素のドラマなのだ」と指摘する（154）。F.O. マシーセンも「エマソンとメルヴィルの相違において重要なのは、メルヴィルは芸術をより高く洗練された精神の上昇としては考えなかったことである。・・・メルヴィルは歴史を超えて人間を基本要素（四大）のエネルギーの源へ連れていく」（466）とメルヴィル作品の本質が精神よりは物質にあることを強調する。

鯨やその他の動物、サンゴ、樹液、腐植土など人間でないものと人間は対立せず、エイジェンシーの働きにより、ネットワークを形成することを、人間でないものには生命があり、また創造性を有することをメルヴィルは『白鯨』をはじめ

いくつかの作品で示した。また、そこには「路上の神」とも呼べる創造性と神聖さがある。本稿は同時代のホイットマンも交えながら、創造性という観点を中心において、メルヴィルのマテリアル・エコクリティシズムを試みるものである。最も、マテリアル・エコクリティシズムとは何か、それはイオヴィーノとオッパーマンが『マテリアル・エコクリティシズム』の「序」において指摘するように、集合的な努力であり、定義は困難であるけれども（10）。

参考文献

Bate, Jonathan. *Romantic Ecology: Wordsworth and the Environmental Tradition*. Routledge, 1991. 小田友弥／石幡直樹訳『ロマン派のエコロジー　――ワーズワスと環境保護の伝統』松柏社、2000.

Bennett, Jane. "Of Material Sympathies, Paracelsus, and Whitman." *Material Ecocriticism*. Edited by Serenella Iovino and Serpil Oppermann. Indiana UP, 2014, pp. 239-52.

Clark, Timothy. *Ecocriticism on the Edge: The Anthropocene as a threshold Concept*. Bloomsbury, 2015.

Duggan, Robert A. "'Sleep No More' Again: Melville's Rewriting of Book X of Wordsworth's *Prelude*." *Atlantic Romanticism*, no. 38-39, 2005. Web.14 Feb. 2018.

Emerson, Ralph Waldo. *Nature. The Selected Writings of Ralph Waldo Emerson*. Edited by Brooks Atkinson. Modern Library, 1992, pp. 3-39.

Heffernan, Thomas F. "Melville and Wordsworth." *American Literature*, vol. 49, 1977, pp. 338-51.

Iovino, Serenella and Serpil Oppermann, "Introduction: Stories Come to Matter." *Material Ecocriticism*. Edited by Serenella Iovino and Serpil Oppermann. Indiana UP, 2014, pp. 1-17.

Keats, John. "A letter to Richard Woodhouse, October 27, 1818." *Criticism: The Major Texts*. Edited by W. J. Bate. Harcourt, 1970, p. 349.

Longinus. *On the Sublime*. Translated by W. Rhys Roberts (Cambridge, 1899). *Criticism: The Major Texts*. Edited by W. J. Bate. Harcourt, 1970, pp. 62-75.

Marr, Timothy. "Melville's Planetary Compass." *The New Cambridge Companion to Herman Melville*. Edited by Robert S. Levine. Cambridge UP, 2014, pp. 187-201.

Matthiessen, F.O. *American Renaissance: Art and Expression in the Age of Emerson and Whitman*. Oxford UP, 1977.

Melville, Herman. *Correspondence. The Writings of Herman Melville*. The Northwestern-Newberry Edition. Edited by Harrison Hayford, Hershel Parker, G. Thomas Tanselle, Northwestern UP, 1993.

---. *Moby-Dick, or the Whale. The Writings of Herman Melville*. The Northwestern-Newberry Edition. Edited by Harrison Hayford, Hershel Parker, G. Thomas Tanselle, Northwestern UP, 1988.

---. *Weeds and Wildings Chiefly; With a Rose or Two, by Herman Melville: Reading Text and Genetic Text*. Edited by Robert Ryan. Northwestern UP, 1967.

Novak, Barbara. *Nature and Culture: American Landscape and Painting 1825-1875*. Oxford UP, 1955.

Sanborn, Geoffrey. "Melville and the Nonhuman World." *The New Cambridge Companion to Herman Melville*. Edited by Robert S. Levine. Cambridge UP, 2014, pp. 10-21.

Stein, William Bysshe. *The Poetry of Melville's Late Years: Time, History, Myth, and Religion*. State U of New York P, 1970.

Whitman, Walt. *Leaves of Grass, and Other Writings*. Edited by Michael Moon. Norton Critical Edition. W.W. Norton, 2002.

Wordsworth, William. *The Prelude, or Growth of a Poet's Mind* (Text of 1805). Oxford UP, 1970.

Zapf, Hubert "Creative Matter and Creative Mind: Cultural Ecology and Literary Creativity." *Material Ecocriticism*. Edited by Serenella Iovino and Serpil Oppermann. Indiana UP, 2014, pp. 51-66.